

郎路生麻◇幹主

川柳新誌

號 月 九

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和二年九月一日發行(每月一日發行)

川柳雜誌 第四卷第九號

川柳雜誌社發行



喜田川守貞著
原名守貞漫稿

(內容見本進呈)

類聚近世風俗志

菊版千二百七十餘頁 天金總クローズ

箱入特製 極美裝

定價金七圓五十錢

內地郵送料二十四錢

一、本書は先年東京帝國圖書館に於て非常なる高價を以つて買ひ上げられたる書にして同館貴重書中の一
たり。明治四十年一度發刊以來絶版となり以來多數の本書要求者に甚だ不自由を與へしものにして、
今回こゝに一層の重版を希はれ再び發行の道へと進みこゝに再び全く改版整ひ、挿繪も昔のまゝ豊富
に入れたり。

二、守貞漫稿と云ふ故喜田川季莊の筆になつて、其の載也たる所の編目は、先づ時勢地理、人事家宅、生
業通貨に起し、男女の扮粧、服裝染織の變遷、華街嬌斜の風情、歌舞音曲、梳木傘履、四季の慣例、
日用の雜具、童謡遊戯車駕等に至るまで、恰く當時の社會の狀態を寫し來つて、全版三十餘卷に及べり、
殊に立化文政以後の情況を叙すること頗る詳細を極む。蓋しこれ著者深意の存する所こゝにあらむ。

發行所

(出版目錄進呈)

東京市淺草區瓦町十番地
電話淺草四七一七番
電話淺草四七一七番

榎本書房

(郵券二錢送附の事)

柳珍堂 忌

◇日時 九月六日午後七時

◇場所 大阪市南區清水町停留所
西入端の坊

◇兼題 「子澤山」三句 紋太選

◇會費 貳拾錢

柳翁 忌

本年は初代川柳の百三十八回忌に相當する。我社は柳祖の遺業を徳とし、天満宮へ献句をすることになつた。柳友諸君は奮て參會されたい。

◇日時 九月十八日午後一時

◇場所 大阪市北區天満(市電南森町下車)天満宮に於て

◇兼題 「先代」三句

◇會費 三十錢

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のために眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌 第四卷第九號目次

感想・評論

松雨逝く
碁石の遁世
甲子園を通じて
麻生路郎
安川久流美
庄萬よし

研究・其他

柳樽二・四篇まで(七)麻生路郎
評釋二・四篇まで(七)麻生路郎
於計良註作
露伴
木村半文錢
蛭子省二
麻生路郎
西原柳雨
麻生路郎
藤里藤園
路舟評
柴舟畫

川柳天の聲

ビイドロギヤマン

光州雜筆

川柳の松江(二)

川柳雜俳集の解題

理朝顔の垣根越し

字朝顔を造る人々

川柳 曇卵の遊(四)

漫論

髮

地 圖

青明忌
臨海川柳會

各地柳壇・川柳書架・川柳家戸藉調

晴路秋行(表紙)

題字
編輯室から
吉田清
小出楯重
路郎生

創作

川柳塔

同

同

同

同

同

同

同

同

同

粒々集

同

同
近作柳樽

西本三笑

太田朝陽

中澤瀾水

岩崎柳路

檜山千代二

庄萬よし

安西杏三

川合舟々

北山悟郎

奈良井仙坊

津田耕水

橋本二柳子

川村花菱
青砥不二綱
長崎柳秀
柴谷柴舟家
諸



鐘樓を餘韻に追はれ駈下りる
 徒らな鉄なりけり蟹糞られ
 蟹むづみ弱者の肉を抉みたり
 萬歳の型で汐干の蟹怒り
 よく見れば蟻羨し羨し
 氷屋の水加羅俱利を見て曲り
 新聞屋拜むでからも断られ
 來客へ仕様のない子にして終ひ
 病んだ母強ひて笑ひを作つたが
 あれからはふみ待つやうな馬鹿になり
 プチブルへ威嚇するよな馬車の汗
 貰はれた家で小猫はまた太り
 弟子入用子守さす事書いてなし
 老舗料又氣の毒な人が來る
 行軍に出合ひ娘は横へそれ
 恥かしい事もあつたと老夫婦
 褒められた聲で藝者は禮を言ひ
 酔へば又座談もうまい人となり
 町内に思ひ掛けない美人が居
 あれ程に言ふたに金に見惚れたり
 お前から先きに這入れし弟子入り日
 金持ち人は人を見下けた歩きやう
 皆咲けばもつと綺麗な花なるに

同 同 大 同 同 同 松 同 同 同 大 同 同 同 福 同 同 同 大 同 同 同 同

阪 江 阪 岡 阪

同 同 翠 同 同 同 穗 同 同 同 炭 同 同 同 無 同 同 同 光 同 同 同 同

峯 波 車 限 路



無理言へば貰らへるものミ子は信じ
 諦めてくれて母親嬉しがり
 あいつまだ餘程氣にしてゐるらしい
 退窟な姿二階の琴を聞き
 運命にまかせて一人病んでゐる
 中年の美を漂はす鼻の線
 蚊の弱さ生あるものゝ亡びたり
 巻煙草共産主義の有難さ
 腕力にまだ訴へる時が來す
 さる人があつて自分の今日の地位
 振り向けば夜店の連が見當らず
 氣安さは破れ覺を氣にもせず
 ひさしぶり町をあるけば當りさう
 久しぶりたゞみの上で寢る廣さ
 面目を施しに行く袴なり
 かなな肩拂つて晝へ立ち上り
 手を叩く音に豆腐屋肩を替へ
 雨の日は格子に近かく琴を聞き
 傘の柄にかくれるやうに娘來る
 勘定場夕べの湯呑忘れられ
 手拭にその銀行の名が残り
 店は大阪にあり茄子の花
 鮮人の女笑ろてる淀川區

同 松 同
 江 崎 阪 戸 江 松 丸 龜 阪 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 清 同
 宵 耽 夫 哉 星 坊 路 同



公用は妾の宅で一夜あけ
泳ぐ人泳けぬ人も吐き出され
いゝ月に虚無僧一人峠越し
不精者蠅はそんなに怖くなし
軍縮はみんな頑張る會議にて
ほんたうに癒りましたを送る妻
毎日のこまに荷造いやになり
作文に先生一寸窓に立ち
夏帽子父親は子に譲りうけ
涼み臺將棋になつて風もこす
古里の山は變らず母は病み
恐怖から醒めて綺麗な虹を褒め
好い女 巡查の眼にも好い女

兵庫 陽春
大阪 翠川
神戸 笑人
石川 太公坊
大坂 九柳
同 椋仙
蟹ヶ池 清春
大坂 よし江
石川 富久雄
横濱 夢人
大阪 將兵
神戸 獸童
石川 北山人

選後に

よみ返へして見て特にすぐれ

た句を抜く露斗君の句では「男かと思はれる程おちぶれる」がいゝ。大槓子君の句では「南無阿彌陀合はず兩手の隙に風」が傑出してゐる。二南君の句では「儲かつてゐるのへ子供飯を急き」の句であるが前二句には及ばない。鮎美君の心おさへて善人に近くなり「貴金屬言葉多きを恐れたり」剃刀のやうに切れやむ男也」の句、何れも凡手でないことを示してゐる。町

二君の句では「蟬曳や葡萄色なる闇もよじ」を採る。源坊君の「借金があるさは見ねぬ造船所」を神戸の松方幸次郎氏に見せてやりたいと思ふ。句は柳樞式の穿ちではあるが、一步造船所に足を踏込んだならば一層この句は光るだらう千鳥君の「正直が集金人で終りけり」は卒直に云ひ放つてあるので採つた。もう少し書きたい人もあるが餘白がないので又の機會に譲ることとした。



松雨逝く

麻生路郎

◇松雨(西垣嘉久三)君が腸チブスを病んで八月九日午前六時十五分に亡くなつた。十日の朝、その訃を手にするまで病臥してゐるさいふこすら知らなかつたのでなんだか嘘のやうな氣もした。

◇私が最後に松雨君に逢つたのは七月の七日の晩であつたやうに思ふ。私に二柳子君が『萬よし』へ松江行の打合せに立ち寄つたところが松雨君が一人でちびく呑んでゐた。松雨君は大酒はしないやうであつたが酒は好きだつた。色の白い、てつぷりさしたい、肉體の持主で酒が廻るさ櫻色になつた。私が出遇つ

た時も、もういゝ色になつてゐた。一緒に松江へ行かないか云つたら「河鹿をさりに來いさいふ案内をうけてゐますので、私も鳥取の方まで出かけやうと思つてゐますから一緒にやつてもよろしいなア」さいふやうな話をした。そして溪間には随分河鹿があるさいふ話から「河鹿を呼ぶのは斯うして呼ぶんです」云つて、河鹿の鳴聲をやつて見せてくれた。「行くさきまつたら、九日の九時半の夜行だから、それまでに梅田へ出て來たまへ」云つて機嫌よく別れたのが永久の別れになつてしまつたのだ。私達はいつても誰にでも愉快に別れなければならな

いと思ふ。たゞへ、そのまゝになるやうなことがあつてもいやな思ひ出は残したくないと思つた。その點からいふと、松雨君は、實に親しみの深いしみじみとした別れをしたのであつた。松雨君は川柳雜誌社の演藝部長の名があつただけに、いたつて寡言な男ではあつたが、酒の席ではよく、すまし込んだ顔で、座興をやつた。殊に福引には新考案をめぐらすことに妙を得てゐた。その發表の仕方、巧妙さに、みんなをチャームしたものだ。呑みこみ出す出したのは、蚊に引導を渡すことであつた。之ばかりは全く板についてゐて、幾度も聞かされても飽きなかつた。こんな早く亡くなるんだつたら、教へて貰つておくんだったに。尤も時々聞かされてゐたので迂路覺には覺わてゐるけれども、あゝ巧にはやれない。

○松雨君は誰か逢つても、いつもにこくしてゐた。決して議論ばつたことは云



はなかつた。川柳に對しても議論めいたことは少しも云はなかつた。こゝろから川柳を樂しんでゐるといふ風であつた。吟

行なきは死んじ松雨君の顔を見ないことはなかつた。少し位からだの加減が悪くても出かけて來た。そして常に、にこくしてゐた。彼が眞面目くさつた顔をした時は洒落をいふた時は洒落をいふ時、演藝部長を發揮する時しかなかつた。彼は至つて眞面目な男であつたが一面實に飄逸なところをもつてゐた。

(寫眞説明)
上圖は大正十年春、郷里但馬國出石権兵衛神社で櫻樹に登り大正花咲翁である。自ら解説がしてある。
下圖は大正十二年の松雨君

殿様の語は
慈姑のやうにはね
萬引を亭主
へそくりかき思ひ
首提けたやうに
早乙女 苗を持ち

なきの句を見れば、彼の滑稽味がきの點に重點を於てゐたかが

知れやう。

◇私が鳴尾にゐる間に、よく鳴尾に尋ねて来てくれた。南洋産の紅雀なまきをもつて来て亡くなつたロンドンを非常によろこばせたり、盆栽の五葉の松をもつて来てくれたり、西洋花をもつて来てくれたりして私や葎乃を大變うれしくさせてくれたものだ。尤も鳥を飼ふ知識のない私達の家族は紅雀は寒さに凍れたのであらう、暫くしてから冷たくなつてしまつたが、それでも一時は大騒ぎして、西宮まで餌を買ひに行つたことを覺てゐる。小さくて背の低い、ひねくれた五葉の松の方は少しく長くあつたやうだが、これも手當が足りなかつたのか、おしまひには枯らしてしまつた。松雨君は、ひよつこりミやつて来て、黙つて座つてゐる。しばらく世間話も何んもつかぬこゝを私や葎乃と話してから又ひよつこりミ歸つてゐた。いつも齒科の道具を入れた鞆を提げてゐた。一寸見るに醫者が患者の家を見舞つたさいふ形だつた。その態度や風貌がいかに醫者らしく見えた。松雨君は齒科の道具を販賣してゐたのだつた。商賣の關係でよく西宮まで出掛けて来たらしい。その歸りに僕の方へ寄つて行くのであるらしかつた。だから編輯なまきには關係しなかつたけれども比較的よく訪ねて来たので非常に親しみが深かつた。今やその松雨君が亡いのである。私達の淋しさは一ト通りではない。

◇松雨君は始め物外ミ號してゐたが、物外和尚の名を知つて、大正十三年に今の松雨に改めたのである。名を覺三ミ云つてゐたが戸籍上は嘉久三である。姓名學上字劃を變へてゐたものらしい。行年三十有七歳で、いよ／＼これからさいふ時に幽明境を異にしたのであるから實に遺憾に堪へない。牌名は自覺速證信トである。

松 雨 句 抄

ちぢぬけた男が獨樂をよくまわし
殿様の鬚は慈姑のやうにはね
流石女の子ですミ間に合はせ
一杯は餘分に子持勸められ
提げて見て此綿入の重いこゝ
不孝者忠義の譯は知つて居り
結婚の祝の紙をおかしがり
寒行はゆうべの辻を又曲り
一白は國からも来た寒の餅
あかぎれの手で豆腐屋はすくひ上げ
牛鍋へ鶴がくちばし入れるやう
すき焼はほまあく／＼で一人入れ
精進をほんミうに給る願をかけ
優等で卒業をして仕なり
仲裁は鞠つく様な手つきなり
氣に入らぬらしい障子の開け合
蠟燭を一本入れて禮に行き
小笠原襖はスーツとよく江り

俄雨一尺の軒見て走り
黒雲が出て折角の握り飯
罪を犯してまで出世を急ぐなり
うれしさはもう水枕干してあり
お見舞の序に替へる水枕
半襟を貰うた義理も少しあり
待つてく居るのへ飯をすませて來
張板がも一つ欲しい好い日和
やりくりを妻はそれとも知らぬなり
御隠居も赤いてがらを舉めて去に
秋田から出た其のまの板園ひ
學校を目あてにパンの店を出し
花道へ仁木彈正生えた様
慰めてさてそれからの黒い腹
當選をして丸帯をねだられる
生れつきなき、其の場を濁すなり
長い鬚氣にして怖い夢を見る
萬引を亭主へを操りかき思ひ
明日からといふ履歴書は綴られる
まあこの埃りはさ布袋さんの腹
逢戻り今度は親が承知せず
水上署むしるを二枚もつて行き
身の上を聞けば可愛い氣にもなり
蠟燭を上げた札所を振り返り
又こゝも札所おんなじ土産物
蚊一つを打つに男性的な音

盛なりし事よ最後の別れなり
早かつた手當を自慢らしく言ひ
掌へのる丈に乗せて兒は貰ひ
親類がありまますさいふ驛を過ぎ
とれくを荷ふ鉢卷宙を飛び
他人から見ればおかしい程嘆き
一月は歳を言ふのに間違へる
兄よりさして簡單な無心状
見込まれて歐洲行きの人となり
札束を讀むに主人はひまを入れ
通帳米屋は筆に糠をつけ
雨傘は重たく虹の美しさ
高燈籠藝妓の袖の長いこと
首提けたやうに早乙女苗を持ち
早乙女の一人は左ぎつちよにて
鎗はさびても親爺なかなか頑固なり
廣告塔母は仁丹丈け覺は
金持さ言はれて係は亦數へ
こほろぎよ添乳のやうに鳴いて呉れ
就職のやれく、さ云ふ肉を喰ひ
鳴り皮も入れて靴屋の値が決まり
女房が死んださいふてほれさせる
名優に一字違つた旅役者
レツテルはめくてれビル冷えてゐる
はねつるべ泉州の野に生へてゐる
出戻つてからの蘇鐵は幅がき



川柳天の聲

於 計 良 作
露 伴 註

蒐集家として有名な林若樹氏の作です。時事吟ではありますが、なかく面白い句があります。味つて下さい。作品は大正四年末までのものです。評註は文學博士幸田露伴先生です。(編輯局)

落選で和歌の威徳もあらはれず
與謝野寛クン候補失敗、品子推薦狀に
歌を添わたわ。

柿二ツ愚痴ミイヤミをなひまぜる
柿二ツは虚子の作、子規の終焉を叙し
て屢々作者自身に及ぶ。

蒲團から亭主時々追ン出され
蒲團は田村俊子の作に夫婦の夜ものも
の一紐しか無い記事あるを諷す。但し自
叙傳小説なれば也。

共同生活活子女で持つたもの
平塚雷鳥奥村のばめ三同棲、共同生活
三稱す。

物好きに一疊半の臺所
國民新聞家庭博覽會、入澤博士夫人一
疊半の臺所設計出つ。

光琳に成金様の御ン名前
三越支店展覽會に成金某々の所藏出品
吳服屋でまる江戸趣味はかつたるい
吳服屋は三越をいふ。

金蘭方汝等が知らぬ分ンのこここ
富士川博士金蘭方の亡佚を説く時偶々
圖書寮展覽會に卷子本古寫金蘭方出陳せ
らる。

光琳にも色々あるもんだネエ
光琳展覽會偽物多し。井候の襖四枚偽
物の尤なるもの。
文選は出來心こは言はれまい
島田翰堂 天文二年の所藏文選を賣つ
て法に問はる。

洋書からヤレ春信の歌麿の

文學士の浮世繪論。

殿様は狸の世話もやかせられ

徳川侯爵狸保護を提唱す。

元老に大風呂敷もひろげかね

大隈伯對元老。

御白洲で見れば聖者も只の人

長田の聖人飯野吉三郎法廷に審問を受

く。

人一人殺す作さと思はれず

長田幹彦自殺者の日記を讀みて自殺す

るものあり。

こし巻をこれはサロメは尙流行る

サロメ流行、須磨子、駒子、天勝、京

子等同時に上演す。

イギリスで相つこめたる馬の脚

坪内上行アービング一座に加はりて興

行。

頼まれもせぬに巴里へ飛びに行き

滋野男爵巴里へ行く。

居据りはどうでもロクな名ではなし

大隈内閣居据。

辛うじて世を遁れたる隠居様

大浦子爵隠居、起訴猶豫。

佛教も新しいのはにらまれる

新佛教官憲の壓迫の爲め廢刊。

間男をしたま言はぬがしほらしい

岩野泡鳴別居釋明。

はらむこは古き女もすなるこご

雷鳥妊娠。

川上の化けて出ぬのがめつけもの

貞奴福桃情事公然の秘密なる。

御用金にて病院が出来あがり

競會病院成る。

競寶に蛇が出るぞごおさかされ

日向代議士競寶(きん子夫人蛇を飼ふ

の説あり。)

皇帝の冠を着るは猪の扁

袁世凱皇帝たらんこす。

妾は馬も乗ります篆刻も致します

江木夫人。

女驍はア、も吹聴したらうか

川口慧阿西藏探險のメートルを擧ぐ。

再興は急ぐこごでもなからうに

柵から牡丹餅ビリケンが取つてやり

寺内忠〇の説あり

御アト、リ自腹なりごも切れますか

乃木家再興。

同衾の義務があるこは言ひかねる

岩野清子泡鳴を對手取つて同棲要求の

告訴をなす。

娑婆出てイケシヤア、こ妻をほめ

日向代議士保釋こなつて歸京する途次

きん子夫人を讃歎して新聞記者に語る。

臭いものに蓋して始政五周年

日韓始政五周年。

三太夫美術ならばと目をつぶり

小笠原長幹伯の彫塑道樂。

大作をつんでもどるのはつかしな

文展落選。

惣花にまいたご違ふ動四等

野口博士叙勳。

フロツクは皆持つものご思召し

各府縣大典祝賀參列服裝燕尾服ご規定

し後、世論に顧みてフロツクご改む。

遺物はいらぬご言へつアヤツラレ

乃木元智、乃木家の遺物不要ご答ふ。

寺内の指金さいふ説あり。

大フーン夫れ舶來の日本品

帝劇タイフーン上演。

通辯を喜多にして行く膝栗毛

スタール博士東海道徒歩旅行。

ヴァニチーの權化さなつて花を賣り

花の會。

頂かぬ様に三田から手を合せ

福澤諭吉遺族贈位を聞いて拜辭す。

我は只八幡太郎にて可なり

義家贈位。

御贈位を今からロチは危ぶながら

ハーン贈位せらる、ロチも御贈位せら

れんミタイムス批評す。

口あけて啞迄うなる三時半

御即位、首相萬歳を唱ふる時三時半。

全國同刻を以て萬歳を誦す。

抱一の松でなければ薪になり

抱一遺愛の松枯る。同好者其材を以て

記念物を作り随つ。

美術部ヤット献する本望さ

大倉喜八叙爵せられて歡大喜地美術館

を献す。

悪名も世襲になる御目出度さ

男爵と美術館を交換せんさする説數年

前より風説せらる。

男爵を名刺に刷つて待ちあぐみ

授爵評判ありて日おくる。

勳四等よこせさせびる無作法さ

代議士亦叙勳無きに平かならずさいふ

説あり。

黒ン坊の頼む木陰に雨がもり

暫くは位山から花がふり

一ト晩で濟んだ騷のあつけなさ

見世物を觀る氣で拜む不届さ

主人側六萬人の混雜さ

迷惑は舞樂も能も同じ事

御大典。

三度目の花は美事に咲き損ね

東京祝賀會當日花の會實行思はしから

す。

春の氣で原稿を書く氣の毒さ

新年の雜誌原稿を十月か十一月ごろに

書かねばならぬをいふ。



川柳雑俳集の解題

西原柳雨

『誹風柳樹』初編より第三十一編まで

明和二年五月に吳陵軒可有(木綿三號す)といふ人が、初代川柳翁の選にかゝる萬句合の中から、一句立として首尾貫徹せる意味を持ち且つ秀逸佳調と思ふ前句だけ、約七百餘句を選抜き、星蓮堂花屋久治郎と諮詢して、小半紙形の冊子に仕立て『誹風柳樹』初篇と題して刊行したのが今日柳界のバイブルとも謂ふべく尊重せられてゐる『柳樹』の根元である、同じくその三年か四年かに第二篇、五年に第三篇といふ鹽梅式に、大抵一年に一册宛位の割合に出版せられたのである。ところが享和を飛んで文化代から天保代に至るの間は大概一年に、四册宛位の割合に版行せられ、兎も角も明和二年から天保八年頃までさつと七十二三年の間に百六十六篇まで發行を續けて來たのである、その内、初篇から第二十四篇までが初代川柳の選句集で、從つて佳句名吟も多いのである、そこで『柳樹』は二十四篇まで見ればよい、その以下を読む必要は無いまで主張せらるゝ、極端論者さへあるけれども第三十篇、第三十一篇、第七十篇等には初代川柳の選句を澤山追録してあるのみならず、化政代以後の

句は悉く駄句狂句ばかりにして唾棄するといふことは少しく考へ物である、況んや川柳を寶曆代以後の江戸風俗史料として取扱ふ處合においては、決してさう無造作に片付けて仕舞ふ譯には參るまいと思ふ、而して柳樹の編纂刊行のこゝを引受けてやつてゐた可有の死は天明八年の五月十八日であつて、その年の七月に發行された『柳樹』第二十二篇正月花角力の出句者の中には明かに木綿の名が見えてゐるのみならず、其の序文を書いてゐる所より推想すれば、可有は急病か少くとも餘り長く病褥に呻吟せしめて物故せしものかと思はる、而してその二十三篇の版下は死ぬ前に大賑出來上つてゐたものであらう、又其篇の終りに、二代吳陵軒の名で次篇に木綿居士の追善句を發表するに揭げてある豫告通りに、翌寛政元年發行の第二十三篇に前年の七月に行はれた追善角力句集が載せられてゐる、その二代目吳陵軒といふ人はさうなつたか不明であるが、可有の業を引繼いで第二十三篇の編輯版行のこゝにたづさはつた人は其序文を書いてゐる下邊如狂といふ人らしい。其翌寛政二年九月廿三日七十三才を以て初代川柳が歿した、そのためか、又は他に事

情があつてか、其處は不明なれども其年は「柳樽」は休刊し、翌三年に第二十四篇を刊行してゐる内容の句はまだ大部分川柳の選句で編輯者は花洛庵一口である。

第二十五篇から第二十九篇までの五冊は和笛の選句を収録し編輯者は二十五篇が市中庵扇朝である外、他は皆星運堂らしく思はる第三十篇は花洛庵一口編輯の任に當り、收容の句は全部初代川柳翁の遺選、第三十一篇は花山麓玉章の編輯で大部分川柳の選評にかゝる神社奉納額の句を収録してゐる、猶、後又「川柳・柳樽」及び「川柳時代年表」等を参照あらんことを望む「柳樽拾遺」初編より十編（大尾）まで

此書は「誹風柳樽」中に載せ洩らした初代川柳の選句中より更に抜録したもので、最初「古今前句集」を題して寛政八年の秋、通油町葛屋重三郎から發行したものを、後星運堂花久がその版木を譲り、享和元年の頃「柳樽拾遺」を改題して上梓したものである、而して其編纂の方法は四季、哀別、神祖、釋教、無常、遊里、戲場、史談、故事等に分つて年代順に序列したもので、蓋し部門的に川柳を分類した嚆矢である、その編纂者は何人であるか判然しない。第二篇にある。序文によつて桃井庵和笛なるべしと主張する人もあれど、その序文が「古今前句集」にも又「拾遺」の初篇にも二篇にもなく、唯突然第三篇

にのみあるは其に疑ふべしとして俄に同意する。こを躊躇して居る人もある、猶その第三篇にも此序文のある本と無い本とあり

つて、今井卯木氏が種本として用ゐた原本には夫が無かつた趣である、後例外澤田薫氏の所藏本第三篇にその序文のあるこが解つたので、卯木氏は意見を附して川柳雜誌「鯨録」第十四卷七月號に其序文を示されたのである。参考のため茲に轉載しておく。

柳樽は川叟の選にして星運堂、此道の好人木綿先生を仲人として目出度取組、家内喜多留を題し送られしより此かた、年々新刻をまつこゝ母の初係を待にひこし、相續いて五々の篇より以愚評を今年廿九篇におよべるを、今一編（卯木氏曰、篇の字の誤記なりや）すゝめんし棚の隅より年ごろの勝番を取出し前篇にもれたる向もあらんかゞならみ、年曆を分け、はた部類にわかつて柳樽拾遺を題す數篇のうへ筆もまばらず、くだを巻かへし、くさくしきはゆるし玉へかし。

于時享和元年辛酉とし 桃井庵和笛 回

其後「類題秀句柳樽大全」を改題せられ、更に又「類題誹風柳樽」を改題せられ、同一の内容にて異つた書名を四つまで持つてゐる書物さいふのは世に稀である。明治以後二二の翻刻本が出来たれども孰れも落丁誤植等多く、先づ今日では本書の底本に採用した卯木氏の「校訂柳多留拾遺」が最も完全なものとして推されてゐる。

「川傍柳」初編より五編（大尾まで）

此書は初代川柳の選評にかゝる牛込御納戸町蓬萊連の月次集

句であつて、全部五卷より成り、其初篇は安永九年八月、第二篇は天明元年五月、第三篇は同年八月、第四篇は同二年八月、第五篇は同三年六月に發行せられ、各篇に朱樂管江の序文若くは題字があり、版元・池端仲町長谷川新兵衛、下谷竹町の例の花久である、開會の日が毎月五日の日、即ち五日、十五日、廿五日の三日であつて、毎年正月に始まり七月か八月を以て終り、九、十、十一、十二の四ヶ月は、休會の例となつてゐることは一寸注意すべきことである。

『俳諧武玉川』初編より十八編（大尾）まで

但し第十一編より『俳諧燕都枝折』と改題せられたので『武玉川』十一編が『燕都枝折』の初編に以下順次『武玉川』の十八編が『燕都枝折』の八編に當る。

本書は初編より第十五編即ち『燕都枝折』第五編までは、四季庵慶紀逸の選にして、其初篇の序に紀逸は點者として、自分の選抜したる秀逸の句を書留のおきたるものを書肆の需に應じて上梓し右附合の句々其前句は事繁きを以て略したる旨を記してゐる所から見れば、可有が前附中から附句のみを抜いて『柳樽』を編纂したのさ殆ど趣を一にしてゐる、紀逸は元祿七年に生れ、其角を祖とする江戸座俳諧の宗匠、二世湖十の門下生として博覽強記多藝多能を以て聞け、四十才の頃前句附の判者となり、倚柱子、十明庵、短長齋、硯田舎等の別號を有し、寶曆十一年『燕都枝折』第五編を上梓したまふ六十八才を以て物故したのである、それから十年の星霜を飛んで明和八年に、

二世四時樓紀逸が同第六篇を出し、翌々安永二年に其七篇、同五年に其八篇を出しそれを以て終結となつてゐる、版元は『武玉川』十篇まで日本橋通本石町三丁目松葉軒植村勝三郎で『燕都枝折』となつてから、小石川傳通院前雁金屋儀助である。

猶茲に紀逸の選を集めた『武玉川』の句も、川柳の拔を拾うた『柳樽』の句を比較して見れば、その句形において、その句調において將又その趣向に於て、頗る相接近した所がある、乙を誹風柳樽と呼ぶなら甲を柳風武玉川でも稱したき感がある、現にその内容の句に一字一點違はざる同一の句や、語句の上には唯僅り相違あるに過ぎぬ類句や、着想全く異らざる句なきが非常に多きを見らるのである、此度此本を校訂する序に、試みにそれ等の句を書抜いて見れば、正に四百四五十句の多きに及んだ、今少し精査したら僅に五百を數へることは出来るであらう、尤も此種の調査に就ては既に岡田三面子、今井卯木、森東魚その他の先輩によりて企しられ、それら川柳専門の雜誌などに發表してゐるから、更に茲に披露するまでもなきことであるが、唯さういふ事實があるといふことだけを一言しておく、この同吟類詠のうちには或は模倣もあらんか、或は剽窃もあらんか、或は暗合もあらんか知らぬが、又同一の人が同一の句を紀逸と川柳との兩宗匠に出句して双方に選抜せられたのも多少あるであらうと思はる、兎も角、夫程互に相連關し『武玉川』と『柳樽』とが編纂した鍋なら、紀逸と川柳とは鴨の味ぐらゐるの關係があるのである。

川柳 累卵の遊び

(五)

路 柴 舟 郎 評 畫

惚れられてゐるに辻占凶と出る
朝陽
女に惚れられてゐると思ふ時、既に女に惚れてゐるの也。



迷へる羊也。辻占いかに賢明なり。雖も又救ふべからざる也。
惣て帳簿を胡魔化する算段に耽るが必定也。あゝ慎むべきは色。

にありなき哲人ふるころには立派に手遅れなり。



夕刊へまあ死にはつたのと覗き 吟女

儂なし。儂なし。彼、夕刊の數行を埋めし今や亡矣。
『まあ、死にはつたの』といふてくれる佳人、必ずしも泣いてくれる人には非ず。

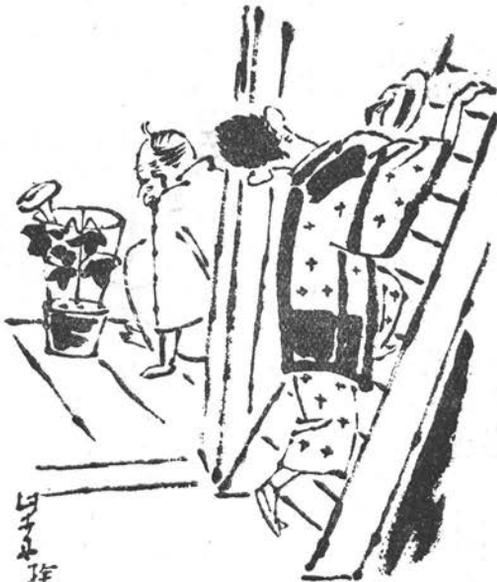
朝戻り父は叱ると思ひきや

翠峯

一人の父がありけり。

「若い時は二度もあるなし」

と悟れるか、否やは知らざれども顔をそむけて、朝戻りの子を二階に駆けあがらしむ。「止めて止まらぬ色の道か」。ミつぶやけるのみ。



朝戻り

母に似た顔で生れよ罪の子よ

三笑

女ならでは夜の明けぬ國に、罪の子が陸續と生れたりして敢て不思議でもなんでもなし。母に似た顔で生れんか、天下は



罪の子

秦半なり。西哲言はずや。確に母の子なれども、必ずその父の子なりとは斷言しがたし。



ドイとギヤマン (上)

— 附 フラスコ と 丸山 —

木村 半文 錢

- 1 びいどろの盃をいれてびいざろすゞぐ也 (安永)
- 2 びいどろの酒をいれてびいざろすゞぐ也 (同)
- 3 びいどろの籾村のはで娘 (同)
- 4 びいどろの中で泳ぐ猫ねらひ (寛政)
- 5 びいざろは心づかひのみやけ也 (同)
- 6 びいざろを逆まにして嫁は強ひ (柳樽三十篇)
- 7 びいざろの盃で下戸三つのみ (同三十四篇)
- 8 硝子の左右薬罐ミやくわん也 (文化)
- 9 硝子を落してはわるい、男 (同)
- 10 硝子でなくとも母は危なかり (同)

びいざろは葡萄牙の語「Vidro」で、玻璃(梵語、一名昆頭梨)即ち方今の硝子の事だが、それを最初に眼にした日本人は可なり不可思議な感懐に打たれたであらう。殊に無色や有色の透明體には一種の魔術が應用せられてゐるのだと解釋した者もあ

らうと惟ふ。あの佛教で方便上に創造した淨玻璃の鏡なごを連想するに、陶器より同種を知らなかつた日本人、科學に無智であつた時音の日本人が不憫でならないのだ。云ふに筆者は日本人でないやうな口吻に聞ゆるが、全く吾等の祖先は然うした時代には一個の洋盃をすら何れだけ珍重愛玩したか知れないのだ。恐らくは水晶や勾玉ミ等しい價値を見出したものに相違なからう。況してビイドロは透明體であつたから尙ほそれら寶玉以上に尊重したかも計り知れないのだ。

然し、有馬元晃の蘭說辨惑には「硝子を古來より『びいざろ』といふは和蘭語にあらず、羅甸及波爾杜瓦爾國の辭といふ、それは昔、かの國の船、此方

へ來りし頃の聞傳へ、通稱となりたるなるべし。和蘭にては「がらす」云ふなり」

ミ其師大槻盤水の口授を筆記してゐる。だかう蘭學をやつた醫者なきには一般人ほごにビイドロを高價に買冠つたものではなからう、相當に和蘭人より常識を吹き込まれて理解を持つてゐたらしい、が、何を云つても例の島原亂以來の嚴重な取締りに遇つてゐた吉利支丹に崇られて南蠻、紅毛の學説が極度に忌みられてゐたから従つて一般人の同種に對する智識は、ほんごに井底の蛙たらざるを得なかつたのだ。

ミこゝろで、此のビイドロミ混同してつた例のギヤマンだがあれは明かに蘭語のデヤマン Diamond の訛首であつて佛語の Diamant 英語の Diamond 即ち金剛石ミ同意語であらねばならぬ事だ。いつの頃、いかなる人が何ういふ機會からギヤマンミビイドロミを混同して同一物質だミ誤解したのであるか、その經路ミ根據は寡聞の私には識るよしもないがこの二個の實質が別個のもので、それが同一物質に混同されてつたことは過去に於て明瞭であるミ斷じてよい。これも盤水は明かに「ぎあまんはぢあまんなり硝子類を調鑄なき此石を用ゆ、一體玲瓏たる玉石なり」ミ蘭説齋惑に教へてゐる。殊に其の硝子類を鑄る用途さへ教示してゐるのは遺に蘭學者であるミ思ふ。志賀忍の理齋隨筆卷の一に

「硝子を切るには火打石の角にて措切るべし、また硝子に水銀を引くには硝子の上に生の棗の汁を付るなり、其上に水かねをひけば自由につくものなりミぞ」

ミ、實驗者露木ミいふ人の話しが紹介せられてゐるが、ビイドロに對する日本人の必然的な工風考案ミして、其の實用化して行くミこゝろに興味が發されてゐるわけだ。

然し、これは話しの方であるが例の豐太閣が大阪城中で据ゑたさいふギヤマン風呂のこゝだ。あれも恐らくは硝子板を應用したものに相違ないミ思はれる。某氏の説に、實は風呂の蓋を一尺四方切抜いて、それに硝子板を嵌めたものだ、ミあつたが多分は其の程度のものであつたであらう。私の憶測では、湯殿の窓に硝子を應用したものでないかミ考へてゐるが、未だそれを立證する文献が見當らないから、さう疑つてゐる程度にすぎない、それに後代有馬唯翁（女蕃頭の隠居）がビイドロの浴槽を造つて侍女を入浴せしめて興がかつたさいふデカタン振りを知るに及んで、或は豐公の故智に倣つて唯翁も斯慮ぶさげをおこし始めたものではなからうかミ推察し、豐公のギヤマン風呂もこれに類した茶目式ではなからうかミ密にお案じ申し上げてゐる次第だ、が、いづれにしても當時の日本人は一般にギヤマンミビイドロミの區別を識らなかつたのだ。若し判然ミ識別したミすれば文政ミ天保の兩度に江戸の兩國邊で見世物に供したミ

いふギヤマン船やギヤマン燈籠は、まさかダイヤモンドを鑲めたものではなかつたであらうと信ずる。恐らくはビイドロ玉の細工ものに過ぎなかつたに違ひない。由來、日本人云ふは江戶人は、づつ以前は唐人云へば支那人は勿論和蘭人も葡萄牙人も西班牙人も、一緒に見做してゐたらしい、それが順次に紅毛人とか南蠻人とかを唐から識別するやうになつたのだが、それと同じ程度にギヤマンもビイドロも最初は混同されてゐたものを、自然に蘭當なごの著述や又必要上の實驗による結果、ギヤマンとビイドロを全然區別するやうになつてきたのだ。それに就て面白いのは津村洪庵の説だ。

「ギヤマンといふもの水晶の如く堅くして玉のやうなる物也オランダ人持ち來る。又常にギヤマンをオランダ人無名指にかねの輪をかけて、はさみ持つて刀劍の代りに用ひる也、石鐵の類何にても堅き物をギヤマンにてきる時は、微塵に碎けずといふ事なし。人をも害すといへり。又物をうつし取るに悉く鮮に寫りて見ゆる也、壁に僅かなる穴あれば、穴にギヤマンをあて、見る時は隣のごま残らず寫りて見ゆる也全體ギヤマンといふは鳥の名なるよし。この鳥の雛を生じたるを見てオランダ人其の雛を取り、鐵にてこしらへたる籠に入れ置く時は親鳥ひなの鐵籠があるを見て、やがて此玉を含み來りて鐵の籠を破り雛を連れて飛び去る其の落し置きたる玉故、鳥の名を呼んでギヤマンといふ事ぞ、此ものオランダ

人も何國にある物云ふことを知らずといへり」
 〇、あるのは鮮かにギヤマンとビイドロを混同してゐるやう。
 殊に全體ギヤマンと鳥の名なるよし以下は随分其人を喰つたものだが、當時の學者の説にしても珍しく稱するに足らう。
 亦、ビイドロに就ては神澤貞幹の翁草庵卷の三に

「また崎府に於て其徒(紅毛人)死する事あれば其骸を速かに硝子をもつて吹込み、恭しく床に直しおき其者の子弟親戚の者この喪をつこめ生前のごとくに仕るこゝ五十日その間炎暑いへごも厚き硝子の口なきに吹包みぬれば臭氣も漏れず存する如く、硝子に骸よくうつら、五旬の中陰充ぬればこれを山野へ昇出で、土を掘り穿ちて、硝子ごごもに其穴へ落し埋み、銘々足にて上を踏固めて、これを藏し、土塊にして墳墓を築くごもなく云々」

と記してゐる。見て來たやうな嘘を吐き——に近い氣もちもする。それで此のビイドロが何日頃吾國に舶來したかと言ふ明確な文献は無い。然し、奈良の正倉院の御物には歴然とビイドロが秘藏せられてゐるご、その御物の品目を舉げてゐた人が、あつたが、筆者は未だ其の拜觀の光榮に浴してゐないから、この説を何ごも裏書きすることが出来ない。で、さういふ説もあるご前提して、私見の一二を書いて置きたい。私の惟ふには、恐らくは例の吉利支丹最初の布教者たる西班牙の高僧フランシ

スコ、ザヴィエルの渡來後ではなからうか——いふ鹽湖は、今のところ正しい説に近いと信ずるのだ。ザヴィエルの渡來したのは西曆一五四九年の秋だ。云ふから吾が天文十八年頃だと思ふ。その時、ごういふ硝子製の器具を傳來したかは例に依つて不明ではあるが天主教徒の胸間を飾る例のコンダツ（念珠のやうなもの）をザヴィエルも飾つてゐたであらうから、恐らくは斯の一行の入港が吾國へビイドロの初御目見得ではなからうかと思惟するのだ。最もギヤマンも或は指輪なごに應用せられて初見參をしたのかも知れない。例の漆庵の説明にも……大分久しい時代の距離はあるが……無名指に金の輪をかけて、さある通り、オランダ人が指輪を飾めてゐたやうに、その時代の西班牙人も飾めてゐたのかも知れない、いづれにしても、ザヴィエルの入國はビイドロにもギヤマンにも多少の關係があらうか信ずるものだ。

ビイドロの最初に舶來した當時は、その品の珍重されたと同時に、値段も莫大なところで賣買されたであらうことは想像するに難くはない。豪奢を誇つた豊太閤の風呂にして、僅に一尺四方の硝子板を用ひたのに過ぎないのであるから、それより遙に後の徳川幕政時代に移つても、相當な高價を保つたであらうと考へられる。それに硝子板は勿論、徳利、皿、鉢等の器具類があり、遠眼鏡や覗き機關の硝子球なども賣買されたのは確實

であるが、これを日本人の手に製造して賣出したのは大分に後代の事に屬しやう。これは三田村氏のびいどろ昔譚からの索引で甚だ恐縮だが、野傾支三味線（寶永版）に「中比の末社願西神樂あふむ米硝」もあり、その頃の替間の名にビイドロを稱したのが存在した。而もその「米硝」書いてびいどろと讀ませたのを見るに上方では糯米でびいどろを吹くのを知つて居たらしい」と同氏も想像して居られる處をみればこの製法を知ることは、總ては製造をなした前後の経過を物語るものであらうと類推するこゝが出来得る（尤も此の製法の不當であることは山田與清であつたか松屋筆記で確か辯駁してゐたのを讀んだ……）と思ふがなにとつても（特に物質的には）鋭眼を有する大阪人が、その頃の珍重品を、長崎傳授の早學問で、でつちあけたいらしいのは想像されやう。敢て、大阪式のビイドロ組製造を穿鑿するのではないが……。（未完）

本社特別社友西垣松雨氏去る八月九日午前六時十五分
藥石効なく遂に永眠致され候に就ては生前學知諸君に
謹告候也

八月

川柳雜誌社



柳樽評釋 廿四篇まで (七)

麻生路郎

(三) 初篇の句 (續き)

疝氣をも風にして置く女形

女形なまがたミ疝氣せんき、そこには、對照たいしょうの滑稽味こつひいみがある。舞臺外ぶたいがいでも女形なまがたに結び、紫むらさきの野郎帽子やろうぼうしを戴かぶき、裾模様すそもようの中振袖ちゆうまきそでを着きし、緋縮ひぢゆくの蹴出くしでを駒下駄こまげだにかませて、歩きぶりから口のきゝ方まで、すつかり女なになりきつてゐた江戸時代えどじだいの女形なまがたをおもひ浮うかべる時に、此この句くは生きて來きる。

新田を手に入れて立つ馬喰町

新田しんたの所有權しゆりけん争まがひで江戸えどへ訴訟そつごに出でて、永ながいこゝ馬喰町ばくちやうの安旅籠やすりゆうに滞在ざいたいしてゐるが、愈々いよいよ勝訴しょうそになつて歸村きそんするこゝを詠よんだのである。

「手てに入れて立つ」で如何いかに欣喜奮躍きんしふんごつして草鞋わらじの紐ひもを結むすんだかが想像さうぞうされる。

朝あさめしを母ははの後ろうしろへ喰くひに出でる

里歸さとへりの花嫁はなよめの態度たいどを詠よんだ句く。結婚けっこん早々さうさう、生うれた家いへで今いままで通とほりに親兄弟おやしあへ弟あにと一緒いっしょに顔かほをならべて食事じきすることに、なんもなく面おもてはゆさを感じかんじ「母ははの後のち」へ喰くひに出でたさいふのである同どう衾あひらした羞はづかしさがよく出でてゐる句くだ。この句くを婚禮こんらいの翌朝あつちの嫁よめの態度たいどださ解と解としてゐる人もあるが、それでは「母ははの後のち」でなく「姑ははなの後のち」でなければならぬ。がさう理窟りくつよく考かんへないでその姑ははなを母ははださしても「後のちへ」さいふ字じには、自分おのれを護まもつてくれるものとしての餘程よほさの親おやしみが藏かくされてゐなければならぬといふ思おもふ。が嫁よめしてすぐに姑ははなに對たいしてそれほぎの親おやしみを感かんずることは不可能ふたふたのやうに思おもふ。「もつゝ寢ねてござれに嫁よめは消きわたがりがり」なきは新婚しんこん後の姑ははなの態度たいどさしてうけられるが「朝あさめし」の句くなきは決して姑ははなではなく、ほんごの母ははださ思おもふ。そこで私は里歸さとへりの朝あさの情景けいけいさしてこれを解と解としたのである。道樂みちがく息子いきこの朝歸あさへりの句くを解と解としてゐる人もあるがそれは下五しもごの「

喰ひに出る』の『出る』が生きなればかりでなく、至つて平凡な句になつてしまふ。

寝てるるは第一番の薬取

昔の醫者が、いかにもよく流行るやうに見せやうがための政策として薬取をぎんなに長くまたせたかゞ、うかゞはれる句である。穿ちの句。

家老は火をする顔の美しさ

大名の愛妾がお殿様の魂をつかみ出して翻弄すればするほど、物堅い家老はさうはさせまいとしていがみ合ふ。その状態を火をする仲だま云つたのである。

仲人へ四五日のばすひくい聲

興入の日も迫つてるのに、花嫁の身に障りがあつて仲人まで日延を申込みに来たのであるが、一寸云ひ悪いので低い聲で云つたさいふ穿ちの句であるが、そんなに巧い句だまは思はないと同じく初篇の句に

婚禮を笑つて延ばす使者が立ち

さいふ句がある。この句も矢張り同じやうに花嫁のからだに障りがある時のこゝを詠んだのであるが比較すれば前句よりも後句の方が少しく巧みであるさいふに過ぎない。

乳貰ひの袖につつばる腰飾

二上りの文句に『去りし女房の形身して行燈に残せし針のあこ、泣き入るわが子をいだきしめ、男なみだに貰ひ乳』さいふ

のがあるが去つた時に限らず死なれた時でも昔は乳呑み兒をのこされるは是非なくみんな乳貰ひをしてわが子をそだてたものである。

しかし、乳を吞ませて貰ふためには、先方の機嫌をそこねないやうに、時々鼻ぐすりを持つて行かねばならなかつた。そして對手が内儀であるから臺所で一番重寶な腰飾を袖にしればせて行つたこゝを詠んだ一篇の哀詩である。

寝た形りで居るはきれいなりんぎ也

戀に上下の隔てがないやうに、格氣に身分の上下がない相當の身分の人でも格く人は大いに格くものである格氣は必ずしも女に限つたものでもないがこの句なごは句振りから見し女の格氣を詠んだ句である。しかし身分柄、やいの／＼胸倉を取るわけにも行かず、苦しい思ひをしながらも寝た形りでゐるこゝを云つたのである。

情炎徒らに燃わたま、で夜が白みゆくこゝであらう。弱き者

よ爾の名は女也か。

人の物ただ遣るにさへ上手下手

他人の物を無代で遣るにさへ上手下手があるさいふやうに解釋してゐる人があるが、それは間違つた解釋である。この句をはつきりさせるためには『人の』を『物た』とやるにさへ上手下手』の二つに切つて考ねればよい。即ち『人の物』でなく『人

の』である。「人の』は「人間は」さういふのと同じ意味なのである。人間さういふものは、他人にただで何かやらにしても上手下手があるさういふことを穿つたのである。下手なやり方をするさういふ、これつばかしのものを呉れて、偉さうに云つたらあゝ「さういふは悪口をいふ。人情さういふものは不思議なものだ。」

あいつさういふたび縮るかゝへ帯
呼ばれて「あいつさういふ返辭をしながらも、きりきりさういふ帯を
まきつけて締めてゆくさまを詠んだので、實に人物が生きて動
いてゐる。軽い句。

料理人客になる日は口が過ぎ
料理人が「お客になるさ、この料理は斯うしては駄目なんだ
さか、さうださか、いろく口はばつたいこをいふものであ
る。穿ちの句。

十分一取るにおろかな舌はなし
持參金百兩なりの嫁の仲人口をきくさ、その手数料が一分の
十兩になつたのである。さて十兩の金を取らうと思ふさ、いゝ
加減な口の利き方ではまさらないので口を酸くして先方を説
きつけるのであるから、おろかな舌はなしさ云つたのである。

あいつは顔へ格子の跡がつき
又しても格子へ来る。お互に顔を格子へ食つつけて話す。あ
まりに強く顔を格子に押しつけてゐたので顔へ格子のあさがつ
いたさういふのである。吉原の情景。

ふり袖は言ひそこないの蓋に成り
娘が何か云ひそこなつた時に、絆腰子の振袖で、いかにも口
にふたをしてゐるやうな姿態をする。その嬌態になんさも云へ
ぬ情味がある。この句は軽い穿ちの句ださういふ、が一面感
じの句ださういふ。この振袖さういふもの、なかく役立つた
もので、好きな男から云ひ寄られるさ、顔を赤く赤にして振袖
の中へ埋めてしまふが、反對にいやな男には袖屏風さなる。

ふんどしをするが湯治のいとま乞ひ
温泉地では、すべてが寛いだ状態におかれるので、ふんざし
なんかは縮めないで浴衣のまゝごろ／＼してゐるが、さういよ
／＼歸國する段になるさ、始めてふんざしを締めるこを云つ
たのである。

袂からけふは是ちやミ珠數を出し
「まあ、何某さんあがりなんし」さ格子のうちから聲をかけら
れても「けふはこれぢや／＼」ミ珠數を振り廻してゐる吉原の
情景があり／＼さ浮び出でゐる。殊數を振廻してゐるのは葬式
のくづれなのである。

御自分も拙者も逃げた人数也

生き残つた腰拔武士もが戦場の昔語りをしてゐるふん／＼
さ聞ひてゐればいゝ氣になつてなかく強かつたやうな口を利
いてゐる。そのくせ、御自分も、拙者もみんな逃げた人数なの
である。いかにも昔らしい穿ちであるが、斯うした心理状態は
今の人間でも持ち合してゐるから妙だ。人間の弱點を實に大掴
みにした句である。

川柳書架

(六廿)

川柳うき世さまへ
漫説

谷脇素文編並書

▽村上浪六氏のはしがき井上剣花坊氏の序、三田村鳶魚氏の序、編者の本書刊行に就いて、坂井久良岐氏の講並贊などが本書の巻頭を飾つてゐる。その主なる内容目次をあければ、

(一)四季をりく (二)家庭パノラマ (三)夫婦仲 (四)世悪人情素破抜き (五)當世女白態 (六)途上ステツチ (七)まゝならぬうき世。

▽大正十五年十二月二十二日發行。大正十五年十二月二十五日三版發行。四六版三三三頁。定價貳圓參拾錢。發行所は東京市本郷區駒込坂下町四十八番地大日本雄辯會。

▽本書は古今の川柳に谷脇素文氏が氏

一流の漫説を描いた現代繪本柳擲までもいふべきもの。興味中心の讀物である。

川柳雜俳集

西原柳雨校訂

▽本書は日本名著全集の江戸文藝第廿六卷で、

「誹諧武玉川」初篇より第十八篇まで
「誹風柳擲」初篇より三十一篇まで
「柳擲拾遺」初篇より十篇まで
一川傍柳」初篇より五篇まで
をまごめて一卷としたるもの。

それ等の内容については別稿西原柳雨氏の川柳雜俳集の解題を讀まれたし。

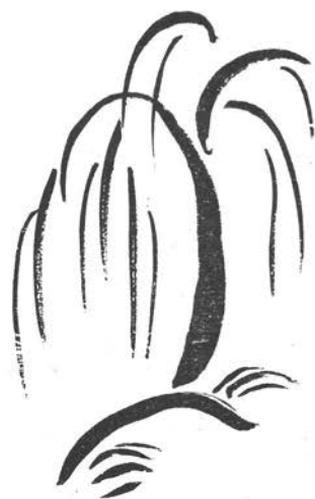
▽本書には校訂者の「解題」「校訂に就いて」なきが、けてある。尙川柳の如何なるものであるかの概容を知らしめるために「川柳と柳擲」なる一文及び「川柳時代年表」を附録として掲げてある。

▽昭和二年六月十三日發行。三五版九三六頁。非賣品。發行所は東京市日本橋

區馬喰町二丁目一番地日本名著全集刊行會。

▽柳書刊行によつて西原柳雨氏が柳界に貢獻したことは蓋し甚少ではないが、その多くは徳川時代の風俗研究の資料としての文献であつて、直接川柳家の血となり肉となるものは甚だ少なかつたこと云はなければならぬ。ところが本書「川柳雜俳集」の如きは柳書中の柳書のみを選んで、嚴密なる校訂をほどこされ、かゝる大部のものを僅に一卷としてまとめられ、携帶に頗る便なるものとして上梓されたことは全く我等川柳に精進する者の等しく感謝せないではゐられない。

▽本書の校訂者西原柳雨氏の名は本書の刊行と共に不朽であり不滅であらう。ただ、うらむらくは、本書が單なる單行本でなくして、全集中の一巻を形成せるために、弘く世人が手にすることの不便な點である。書肆の一考を煩はしたい。



川柳塔

○ 西本 三笑

赤手柄粉石鹼の泡を立て
女房の乳の黒さを見るにつけ
日曜の朝寝に目立つ襟の垢
仲人の下駄を娘は見に降りる
信心か知らねぎ母の出がちなり
鑛山を降る毒婦の貯めてるる
手傳つて蚤をにがして吐られる
相談に歸つた次男髭が延び
後添を入れた弱味に父黙し
妻の出た後をまゝ母掃きなほし

○ 太田 朝陽

御察人切符を買ふを横で待ち
走馬燈妹そつご煽いで居
奇遇ですねえご五重の塔で逢ひ
お召艦波のまにまに出迎へる
古道具集め漫書にしてしまひ
○ 中澤 濁水
一禮にみんな吸物碗を取り
病人が今度は機嫌よく迎へ
後添が来て干竿が不足をし
家移りに病妻は寝て指圖をし
仕立物机の脚へくけに来る

○ 岩崎柳路

芥川もうバイブルの字が見えず
丸洗ひこんな所に穴があり
ウエトレス窓一杯に良を出し
衣紋竹宿屋の二階風があり

○ 檜山千代二

いゝえいゝえ獨身で行く紙を切り
泣けて来た親在りし日を説かれては

○ 庄萬よし

記者の眼に危険な會社斗りなり
切れたのに路次の奥だこ誘はれる
來ないのに決めてゆつくり呑み始め
掛取りの耳へ棚經聞えて來

甲子園にて

○ 安西杏三

本壘打飛んで動かぬ雲の峰
よくもまあ見飽きぬものよ壁のしみ
蜘蛛の巣にかゝつて枯葉落もせず
巡查上りミ云ふ叱り振り

○ 川合舟々

軒店のまゝの時代が戀しゆなり
其隣りへ今新築の音をたて
代表は歸つた上の事になり
あごみりの色の白さを思ふなり
留守番がかうまで寢ようこは知らず
叱られてゐるので連も歸るなり
道をきくだけに朝日の客ミなり
近所でのむづかし屋へも行く無邪氣
親戚はなれてからも短氣なり

○ 北山悟郎

きりくす籠に入れるこ哀れなり
無事らしく里へ無沙汰が續く也
ごたゝがあるこは見ぬバンガロー
店の暇ごもの眼にも眼立つなり
情死をしたミで癒ゐるもので無し

○ 奈良井仙坊

自分さへよければいゝと思つてゐる
飛石の上で息する病上り

津田 耕水

○ 少うしはぎうかななるか金の事
泣きながら世間をうらむ事を知り

橋本 二柳子

○ 分れ道帽子握つたまゝ戻り
屋上で見るこあそこも蚊帳を吊り
こゝからが廿四間の道路なり

山中温泉の句(三句)

浴槽にひたるミ山が見ぬなり
山ばかり見て山中の雨がよし
淋しさは山中の空雲つて來

粒々集

句帳より

東京 川村 花菱

ポンカンを喰ふ現物屋立ちのまゝ
メーデーの巡査はこりをはたきあひ
五月の晝をむせる 白粉
明るさは地に降り込む雨の足
曲馬團みんなよごれる白の色
水彩でお書きこ秋の雲が浮き

四ツ角は淋し物賣考へる

言葉とはおもしろし女動いて來

飴屋に夏の早い中形

なまぬるさ嵐のあまの水たまり

○ 松江 青砥 不二綱

何うしたご聞けばお米が無いご云ふ

立話 中折の溝深うなり

くらがりで鼠の様な戀をする

そんなエライ八雲ご知らぬ町の人

洗濯の泡が腕輪の様につき

何時の間に來てゐたものか多数決

○ 御影 長崎 柳 秀

乳母車同じ所を往き戻り

踏み切りの向うも同じ程の人

馳ける程舞妓金魚の型になり

立ち寄つた廓の姉を見違へる

○ 魚崎 柴谷 柴舟

幕が開いても幕が下りてもコンバクト

濁江の鮎は時々鼻を出し

埋朝顔の垣根ごし

麻生路郎

さきに募集した埋め字「許嫁○○○○○○○○計り也」や「つまる所○○○○○○○櫻咲く」は中七首字を埋める練習であつたが、今度は上七首字を伏せた

○○○○○○朝顔の垣根ごし

を募つた。原句は安永時代の句で

よめの噂をあさがほの垣根ごし

こいふのであるが、この句がすぐれた句であるから課題にしたのではなくて、中五、下五の「あさがほの垣根ごし」こいふ十首字を諸子が如何に生命づけるかこいふこゝに興味を繋いだからである。果して佳句の多くが得られたか、さうかを應募總數百六十五句から検討して見やう。分類の方法は私の便宜によつたまで、深い意味はない。

仲のよさを詠んだ句では

雑借りに來た朝顔の垣根越し
ちやん家にかと△△△△△△△△
お裾分する△△△△△△△△△△
碁敵を呼ぶ△△△△△△△△△△
頼みごとまた△△△△△△△△△△
くらべ合ひする△△△△△△△△△△

松 同 素 同 督 山
郎 生 字 月

裏めに來て居る△△△△△△△△△△
寢卷同志で△△△△△△△△△△△△
避暑ばなしなど△△△△△△△△△△△△
宅ののろびを△△△△△△△△△△△△△△
眺太郎
山雨樓
ひろし
鮎美

の十句を探つた。十句が十句も仲のよさを詠んだ句だとも云へぬが鬼に角隣同志に住んで親しみのあるところを詠んだ句を拾つて見たのである「雑借りに來た」「頼みごまた」「お裾分する」「碁敵を呼ぶ」の句さりとく、い、句だ。中でも「雑借りに來た」の句なさは技巧の句さして推賞するに足りる。此の作者の句に

戀人と呼ぶ朝顔の垣根ごし

こいふのがあつたが「碁敵を呼ぶ」軽さには及ばないと思つた次に反目を詠んだ

反目の今朝朝顔の垣根越し
犬さ 猿 だ が △△△△△△△△△△
大家と 店子 △△△△△△△△△△
村句茂
花 蝶
ひろし

隣同志の反目も、垣根越しに咲く朝顔の詩的情趣に溶け込んでゆくところ、作家の手腕でなければならぬ。殊に「犬さ猿だ」の句にその妙を見る。私は原句よめの噂をよりちこの句の方が遙かに複雑味もあつていゝと思ふ。「大家さ店子」の句は必ずしも反目の句さ云へないかも知れぬが、大家さ店子さ常に對立して考へられることが多いので、この場合、こゝに收めておいた。

子どもを中心にした句では

兒の好きさいふ朝顔の垣根越し 馬行

繩飛びの横△△△△△△△△△△
 子を叱る聲△△△△△△△△△△
 子福者を見る△△△△△△△△△△
 ちやん家にかき△△△△△△△△△△
 素生 好實子 松郎

の外にまだ數句あつたが、垣根越しを吐き違へた句かさもなく
 は平凡な句にすぎなかつた。なほ鞠を詠んだ句が三句あつて此
 の部類に入れやうかとも思つたが、鞠は鞠で別に扱つておいた
 『兒の好きさいふ朝顔の垣根越し』さいふ句を一讀した時に朝
 顔の垣根を越すこゝが好きださいふやうに解れる難があるこ
 思ふ。題は『朝顔の垣根越し』でなく『朝顔の垣根さし』なの
 であるから、この句なごもその點から見て『兒を好きさいふ』

訂正すれば句意がはつきりすると思ふ『こし』と『こし』の
 違ひはこの句以外にも澤山あつた『繩飛びの横』の句は寫生の
 失敗で全く説明に墮してゐる『子福者を見る』の句は『子福者
 』と一字訂正すれば面白い句になる『を』と『さ』の僅
 に一字の使ひ方ではあるが佳句になるか成らぬかのけじめが常
 にそんなところにあることを知らねばならぬ『子を叱る聲』は
 原句の『よめの尊を』とおなじ行き方ではあるが、やゝ單純だ
 鞠を詠んだ句では

まり捨てるや朝顔の垣根越し 松郎
 鞠飛んで來た△△△△△△△△△△ 馬行
 ころんだ毬△△△△△△△△△△ 鮎美

の三句があつた。何れも同想である『ころんだ毬』の句は七音
 字を埋めなければならぬのに六音字しか無い。これは句さし
 ての巧拙さか、字足りずでもないさか悪いさかかいは別

埋め字としての注意が足りない云はなければならぬ。
 で此の場合『ころんだ毬が』と『さするか』『ころんだ玉』とすれ
 ば、よからうと思ふ。『まり拾てやる』の句も『鞠飛んで來た
 』の句も埋め字としては、びたりと嵌まつてゐるが想の上に新
 しさが無い。埋め字であるから、びたりと嵌まる文字さへ入れ
 れば足りる譯であるが同時に新味のある句、優れた句であつて
 欲しい。

蟲や獸を詠んだ句では
 とんほつ、朝顔の垣根越し 松郎
 犬の鈴きく△△△△△△△△△△ 同
 きりくすちよん△△△△△△△△△△ 同
 馬に草やる△△△△△△△△△△ 同
 にわざりを追ふ△△△△△△△△△△ 眺太郎
 逃げた蝶見る△△△△△△△△△△ 同
 鶏呼んでみる△△△△△△△△△△ 三五
 猫追ふてみる△△△△△△△△△△ 同
 飼犬を呼ぶ△△△△△△△△△△ 好實子

なきがある『犬の鈴きく』は『猫の鈴きく』に『馬に草やる』
 は『牛に草やる』にした方がより自然ではなからうか『にわざ
 りを追ふ』や『飼犬を呼ぶ』なきは半凡すぎる『鶏呼んでみる』
 や『猫追ふてみる』は、いかにも感こらしくていかぬ。この外
 『犬が抜けて來る』だの『犬つれてゆく』だのがあつたけれど
 も、何れも埋め字のための埋め字さいふ嫌ひがあるから捨した
 『きりくすちよん』は隣に住んでゐる人物が、これだけの短
 い言葉の中に出てゐるのが嬉しい。

天象を詠んだ句では

淀川の風朝顔の垣根越し

素生

素生 駒人 萬よし 童翁 花蝶

なさがあつた。其他にも數句あつたが平凡なスケッチにすぎなかつた。天象の句は單なる寫生に陥り易く佳句に乏しかつた。『淀川の風』なごは變つてゐていゝと思つた『降り續くま』や『初霜の唄』は共に、越しこしこを取り違へた句である。でなければ句境があまりに詰らない。

男女關係を詠んだ句では
だあまつて來て朝顔の垣根越し
松雨 吐露樓 馬行 無心 駒人 好實子
嬌曳の待つ 月でものをいふ 嫁に行く今朝 よい婚が來た
なごがある。『だあまつて來』の句は戀愛を非常に美しく取り扱つてある。嬌曳の句では後句の方がより技巧的であることを知らねばならない。此場合句の巧拙を云つてゐるのではない。

朝顔の事を詠んだ句では
咲いたく 朝顔の垣根越し
天津美 鮎美 突支坊 山月 濁水
今日も亦咲く がんじがらみに 寢めながら見る 隣りから咲く
の外に木に竹をついだやうな句が十數句あつた。私は右の句を

讀んだ時に、なんぞ樂々ミ句が作れるものだと思つた。これではいけないと思ふ。埋めるべき文字は僅に七首字しかないのである。もつこり、苦心を拂つて欲しい。たゞ七首字を埋めるこ

ミばかりに囚はれては駄目だ。
斯うして分類して見るに、僅に七首字の相違から來る同根の句數が、されば多數にあるのであるかが判らなくなるだらう次に残つた雜も名づくべき句のなから、比較的佳句に信するものを抜いておこう。

假宿の今朝朝顔の垣根越し
松雨 松月 松郎 松月 松郎 松月
哥磨の繪へ 陰膳を見る 探偵のごと 故里の聲 女房の禮 隣りから 泣いてるな 木魚せはし 干物は赤 娘は見ぬ
松郎君の『陰膳を見る』の句を一陰膳が見ゆ朝顔の垣根越しとしたならば、すつとよくなりはしないかと思ふ。『木魚せわしう』はいゝ。鮎美君の句では『女房の聲』の常套的段の句よりも『村長の聲』の方が遙に光つてゐる。馬行君の『聲だけがする』がいゝ。

募

集

句

鬢

村田周魚選

怪て鬢切られるだけに飛を出る
 はれものの様に鬢をそつと脱ぎ
 借りて来た鬢は一寸落ち付かず
 床山は獄門のやう鬢置き
 立女形かづらを脱げば禿て居る
 鬢をとれば意外にも男なり
 秋まつり鬢は村の優さ男
 鬢でも買つてやりたい親心
 恥かしさ鬢を夫知らぬなり
 鬢だけこつて天井言ひつける
 大掃除柵から落ちたはて鬢
 飛出しは小僧の鬢がくくし
 流行は鬢でしめす美容院
 大島田女形の肩が揺れてゐる
 女形鬢の儘で地聲出し
 村芝居鬢が似合ひさわがれる
 上品に鬢々見せて横を向き
 樂屋裏鬢を取つて次幕待ち
 立女形鬢をぬぐさ風があり
 ロケーション鬢のまんま盡にま

翠峰 黙童 花蝶 件内 突支坊 竹雪 逸紅 奇骨 太公坊 さ舟 照葉 柳秀 鎌月 富久雄 夢人 金鏝子 赤ん坊 源坊 郊村

捕物に鬢を飛ばす村芝居
 鬢だけ脱であぐらを組んで飲み
 坊さんの鬢後にしわがあり
 鬢も冠つたような鬢を染め
 鏡臺へ鬢をうつして大胡座
 ほて鬢二人並んでよく喋り
 奉祝の街を鬢でねり歩き
 眼の色に似合はぬ赤い毛の鬢
 五右衛門に犬が驚くロケーション
 エキストラ鬢で出るも嬉しくて
 初舞臺かたい鬢が氣にかゝり
 飾窓顔をしのばす鬢を置き
 鬢から襟足の素地少し見え
 假装會鬢のまゝで飲みに行き
 旅役者宿料に鬢入れて行き

刀四郎 耕水 柳々 千鳥 北山人 醉夢 志郎 錦魚 町二 濁水 同 茶無朗 同

佳吟
 次の幕鬢へ雪が一つ降り
 友達に鬢は重く冠られる
 鳴穂堂 錦魚

川柳家の戸籍調べ

□ 係 二柳子生

(一)姓名 (二)雅號 (三)別號 (四)現住所
 (五)生年月日 (六)職業 (七)好きな句 (八)
 好きなタイプ之女 (九)自信の句 (一〇)川
 柳以外の趣味 (一一)配偶者の有無 (一二)盡
 ひなもの (一三)川柳に手を染めた年月

(188) 上野金鐵子
 (一)上野康 (二)金鐵子 (三)鐵郎、鐵水 (四)石川縣小松町本折町一四 (五) 俳號 (六)明治三拾二年一月拾九日生 (六)金物商 (七)「孝行はい、が男がしなびて來路郎」尊さはあるが盡なる現象よ」半文錢、眞つ直ぐな道をそれよこいふ悶ね」久流美 (八)下町風の女、愛嬌のある粹で地味な着附の方し (九)「讀書、玉突、釣魚、謠曲、琵琶、俳句、茶の湯をそれから食道樂 (一〇)有り (一一)モダンガール、ぶる奴氣障な物及び事一切 (一二)昭和二年三月當地マコト屋柳一路君の傘下に加はりてより

(一〇)足原百々郎
 (一)葦原房雄 (二)百々郎 (三)銀星普通これの主に使ひます (四)島根縣松江市横濱町 (五)明治四十四年十月十二日生 (六)新聞社員 (七)好きな句は澤山有ります「枇

稲光り

矢田右大臣選

稲光り蚊帳の寝顔を見せて消の 伴 内遠
 稲光り闇にハツキリ船が讀め 突支坊
 稲光り今年の出来を語り合ひ 逸紅
 稲光り春中の子供泣きやまず 奇骨
 稲光りあつみ云ふ間もあらぬ音 さ、舟
 詰將棋稲光から手がつまり 椋仙
 稲光プロバガンダの姿なり 北生
 稲光ナニ戀人よ僕がゐる 鎌月
 稲光り怖い話に實が這入り 茶撫朗
 稲光だまつて小供膝へ来る 翠峰
 稲光り遠く眺めて船世帯 郊村
 稲光り塔はすつくさ立つてる 彩秋
 稲光りうちべんけいを恐がらせ 刀四郎
 看板がはつきり讀めた稲光り 耕水
 稲光りさうやら遠い色になり 源坊
 稲光り一雨欲しいむし暑さ 夢人
 稲光往來急ぐ音になり 錦魚
 稲光り枕敷帳へは届き兼ね 與詩夫
 稲光りもう夕立は止んで居る 柳秀
 生酔の美しく見る稲光り 柳秀
 稲妻に切られた様に雲がさけ 同
 稲光待つそのあごの音を待つ 無限
 稲光その瞬間に何もなし 同
 涼み台兒は恐くなる稲光り 鳴穗堂
 稲光り宿直はもう寝るさ決め 同

雷に張り合のない稲光り 千鳥
 稲光り宵の口戸を締めたきり 同
 稲光り見えぬ眞晝を鳴つて居る 將兵
 稲光り今度は遠い空で鳴り 同
 稲光り闇がまたくやうに映え 濁水
 稲光り燈臺の灯がまた點り 同
 夜遊びの歸り稲妻しきりなり 醉夢
 夕立に稲妻だけがまだ光り 同
 稲光り囁く戀を押しへだて 金鐵子
 稲光り竹む方は女なり 同
 稲光り二本まで讀む松林 同
 佳吟
 稲光り苦から首を出して見る 錦魚
 稲光り海荒れてはいる音がする 金鐵子
 濡れてき屋根はつきりさ稲光り 彩秋
 稲光り見へた所さ見えぬさこ 九柳
 稲妻の刹那ハツキリさ人がゐる 町二
 硝子戸へ癩癩めいた稲光り 千鳥
 稲光り病む母親の額まで 北山人
 稲光り一三人待つ田舎驛 富久雄
 稲光り將棋の二人だけ残り 鳴穗堂
 登山服豫定を變へる稲光り 同
 稲光りはては子供も慣れて来る さ、舟
 稲光り父おちついて土間にゐる 同

杞熟れて貧乏寺も景になり(八)やさしい真から女らしく、上品でべらべら喋べらない女(九)恥しくて人様の前に出されない位です「酒買ひに口笛で行く夕まぐれ」(一〇)映畫が大のすきなんです、將棋、讀書(一一)ありせん(一二)蛇が大きらい、陰で悪口を云ふ友達、よく喋べる女、表面は和やかに見せて心では色々な悪計を廻らし、大野心を持つてる奴はいきなり殴りつけてやりたい氣がします(一三)大正十五年十一月頃からです

(一四)鹽 吟 益 男

(一)鹽吟益男(一)春忘(三)なし(四)函館市新北町二九五番地五(明)三十八年十月廿六日(康)公(同)日(六)洋物類の行商人(七)人情味的に富んだもの(一切れ話し女しきりに旅をつぎ)「さ云ふ風のもの(八)色々ありますがまあ眼の格恰の良人(九)自信の句なんてまだ(十)始めてより活字になつたのは十度位より有りませんがいづれも自信を持ってません。川柳家だなんて云ふさ笑ふ人が有ります(十一)ベスト單玉の愛用者(十二)目下選定中(一三)洋装の藝妓。ダン形の娘さん(大猫人參(十三)大正十五年の暮れ頃より

(一四)大空天痴人

(一)廣江孝雄(二)大空天痴人(大空は吾家の門名(三)耕翠又ハ藤川野耕翠 廣江夕光(之等は主に短歌の方に使用してゐる

地圖

◇ 兎 絲 子 選

乗替を知らず食指が地圖を這ひ濁水
 此邊さ地圖へみんなの顔が寄り同
 新知事へ下僚は地圖で申し上げ同
 世界地圖廣いばかりの支那でもさ、舟
 良い口のまだなし地圖の破ぎ來同
 地圖を見せく、今來た街を説き獸童
 新開地地圖には細き書いてあり同
 計劃は地圖へあつさり線を引き源坊
 地圖ない街が殖むてゐる事を知り同
 されく、と地圖へ眼鏡を持て父茶撫朗
 地圖を見て此處だつたなも一昔同
 廣告の地圖に名所があり過ぎる翠峯
 一人旅今更地圖のありがたさ同
 地圖通り行けばよつほぎ損な道醉夢
 地圖出して之れから之れを迷せ同
 地圖の色塗りかへさせる力なり錦魚
 まだこんな所かと地圖へ溜息同
 北極を指す先生の腰が伸び町二
 休暇前地圖を圍んで揉めてゐる刀四郎
 地圖持つたのを團服が取り圍み志郎
 交番で地圖を擴げて聞き直し柳秀

小西兎絲子 共選

橋本二柳子 共選

團體の地圖を圍んで飯になり北生
 世界地圖之れが日本と思へない太公坊
 パノラマの地圖見て少し慄らす雅路
 おらが村さこださ地圖へ虫目鏡突支坊
 追々と世界は地圖の色をかへ花蝶
 支那に手をつけて樺太教へられ北山人
 地圖を書いて貰つて小僧出る金鐵子
 世界地圖下宿の壁になほ餘り夢人

沈黙の參謀の灰地圖へ落ち濁水
 頂上に地圖吹きまくる風がありさ、舟
 地圖にない村で平家の血が續き町二

◇ 二 柳 子 選

地圖で見るとは大分違ふなり花蝶
 地圖を見て居りながら母だめ雅路
 町内の地圖に我が家を書いて柳秀
 地圖の無い街が殖むてゐる源坊
 此邊に行つてた頃さ地圖を見せ北山人
 地圖出して父の故郷を懐しみ刀四郎
 地圖通り行けばよつほぎ損な道醉夢
 世界地圖ト宿屋の壁なほ餘り夢人
 地圖を書いて貰つて小僧出る金鐵子

ます(四)島根縣八束郡乃木村上乃木二
 千〇九十六番地。(五)明治卅七年五月二
 十七日(六)農業(主として野菜果樹園藝)
 (七)新米でまだ川柳の全般に亘つた研究
 無くよろこばしい句に接してゐません(八)
 健康美に輝く女。眉鬚や白粉でごま
 かしてゐない女(九)まだありません。必
 ず作る考(十)短歌、散歩、讀書(十一)有
 昨年五月二十二迎ふ。本年六月二十五日
 長男生る(十二)主義者さ名のつく者。へ
 つらふ者其他には、森羅萬象あるがま
 に眺めてゐたい心を持つてゐます。であ
 まりありません(十三)大正十五年四月
 本田溪花坊氏來松歡迎句會に出席して作
 つてみたのが始、全没さなる。同年十一
 月まで休止して其月松江の松陽新報柳壇
 の題詠「秋風」に應券「秋風を立切つた
 室に母の咳」一句入選。新米の新米也。

(一)奈良井仙次郎(二)仙坊(三)柳人、旭
 仕、柳吉、他に二三あれど都合悪き故秘
 す(四)松江市雜賀町一ノ一(川柳雜誌松
 江支部)(五)明治四十三年十二月十八日
 生(六)無職業今は兄の金物商(小賣)に手
 傳ふてゐます(七)雜誌の句を讀んでい
 と思つた句が好き數多あつて一々頭にな
 し「電報で金送れさばかながへた」舟帆
 「金の事云へば名人氣が變り穂波はおほ
 へてゐます(八)道なんかで出遇ふた時素

地圖を手に入れて間諜役がすみ 錦魚 地圖で見るとこれッばかりが遠く
地圖を持ちながらやつぱり聞か 同 野立所の机は地圖がある許り 志郎
来て見れば地圖大阪で役立たず 町二 地圖書いた紙切持つて丁稚は出 同
北極を指す先生の腰が伸び 同 廣告の地圖に名所があり過ぎる 翠峯
良い口がまだなく地圖が破れて来 さ、舟 旅立ちに地圖も大事な一つ也 同
家出する氣か大阪の地圖を買ひ 同 乘替さ知らずに指が地圖に這ひ 濁水
され、地圖へ眼鏡を持った父 茶漣郎 此邊の地圖へみんなの顔が寄り 同

大阪創立川柳會

漸く秋風立つた菊月十日、柳翁忌を旬日の後に控えて延々になつて居た支部創立會を催し升が、拍子木としては大阪で初めての川柳會ですから同好者お誘ひ合はされて何卒賑々しく御後援御出席の程御願申上

◇日時 九月十日(第二土曜日) 午後六時ヨリ

大阪市日本橋一丁目交又點北ノ辻東へ入

◇會場 日本橋俱樂部 電話南三四二四番

◇兼題 「話」二句 鉛筆持參願ひ升

◇會費 金三十錢也

▼兼題のみの方は會費金廿錢(郵券)封入前日迄に大阪支部宛に御投付下さい。發表詩廿錢大阪號を呈す

大阪市西區立賣堀北通二 ヤマトメタル商會内

主催 拍子木川柳社大阪支部
後援 川柳雜誌社 大大阪川柳社 神戸川柳聯盟會

的だと胸に感じた女が好き、種類は何にか、わらず(九)まだ研究中に付きこれ云ふ自信の句なし「長男に生れて淋しい飯を食ひ」位なもの(一〇)花園俳句寝る事、活動寫真、句會、散財、他りもの數多あり(十一)なし、まだ、前途の事で見込付かず(一二)自稱大家、女教員、女社員、雨、年寄、句會での全没(一三)大正十四年の末頃趣味を持ち作りだした時は十五年の四月十三日でした、まだ日淺し

六 號 室

▽馬行君がやめたので戸籍係がなくなつた。誰でもやれさうでなかく面倒な仕事だ。第一筆ぶせうでは動まらない。適當な係が出来るまで忙しい二柳子君が引受けることになつた。内務、大藏、司法兼任といふ形である。

▽前號で古句質疑欄新設のことを發表したところが早速質疑が来た。次號からほつゝ質疑の應答が載ることになつてゐる。次に質疑に關する小規をかくけておこう。盛んに利用されたし(一)質疑は古句に置くこと。なるべく古句の出所を書添えて置くこと。(二)質疑ははがきで一人一問のこと(三)質疑のはがきには住所姓名を明記すること但し誌上の匿名は差支なし(四)次の句については答へない。未番の句、一度答へた句(五)質疑應答の順序は必ずしも先着順ではない。研究の餘地ある句は次號廻はしとする。質疑が輻輳した場合も又同じ。(六)質疑は必ず本社宛の事。



川柳の松江(二)

麻 生 路 郎

ひる前に、一行は大社驛へ下車したが、雨はながくやみさうにもない。「なあに、大社へつげば、からりと晴れて川柳日和ださいふ宣傳部の天気豫報もあてにはならない。四人は張子の虎のやうに首をあつめて善後策も大きいが、兎に角大社まですぐに出かけるかどうかについて協議をひらいた。

お伽ばなしなどでは、こんな時に、きつき神様が人間の姿になつてあらはれ、どうしていかを教えてくださるものだから——と出雲の昔にかへつたやうなのんびりさしたことを考へて

あると、果してそこへ一人の青年があらはれ、親しげに我が一行に近寄つて来た。

神様のあらはれ方があまりに早すぎるのでいさゝか面くらつたが、萬よし君に話しかけてゐる様子では、たしかにその神様に違ひない。

「私は尾添雷相ですが、あなた方は大阪の川柳雜誌の方ではありませんか」とその神様が云つた。「いかにも左様」といふ萬よしの應答があつて順次に名乗りをあげるさうに親しくなつた。異國で日本人に遇つた形がある。さうなるさう急に元氣が出

た。兎に角驛前で簡単な中食をすませてから大社へ参詣するこゝにきめた。こゝで一才尾添雷相君が何者であるかを紹介しておこう。

「週刊朝日」の夏期特別號に發表された懸賞文藝のうちで川柳の一等當選者が、即ちこゝにあらはれた尾添雷相君であつた。句は「夏休み父より偉い子が戻り」であつたが、私が大阪の大學病院のベッドの上に横ばつたまゝで、この句を選んだ時に、尾添雷相といふ不思議な、耳馴れぬ號に、多分誰かの匿名ではなにかと思つてゐた。だから尾添雷相と名乗る男に、しかも山陰まで出かけて来て、突然出迎をうけやうなごは夢にも思つてゐなかつた。それだけに未知の柳友が忽ちにし、相識の柳友となつたことをうれしく思つた。雷相君は高松村の人で、今朝山から私等と同じ列車で大社へ来たのであつた。雷相君は謙讓な態度でぼつ／＼と話した。僕等の來るこゝこについては「今朝の新聞で見ました」と話してゐた。やがて雷相君の案内で大社に参拜した。柳運長久を祈つた出雲へ知らさずに結婚した私達

四〇

夫婦も調査の行きさういたこちらへは既に知れ渡つてゐる筈なので改めて報告はしなかつた。大社については私が多くの筆を費す必要があるまい。案内人の語るこゝろを素直に聞ひて、雨の中を大社の川柳家上田一匹君のさころまで引き上げた。一匹君のうちは大鳥居際の土産物屋であつたが、こゝで暫く休憩させて貰つて少し豫定の時間には早いが松江まで引返へすことにした。雷相君は松江の句會へ同伴したいが、所々用に行けないと云つて残念がつた。そして朝山を乗越して出雲今市まで見送つて呉れた。

二時すぎ松江についた。打合せた時間より早くついたので驛から穗波君へ電話した。穗波君、仙坊君、不二綱君、なにわ館主等の出迎をうけて、大橋を向ふに渡つた湖岸の宿に落ちついた。宿の二階から湖上に流れてゐるやうな嫁ケ島をながめてゐるさ、昨夜大阪を立つて來た事などはすつかり忘れてしまふ。人間は疲れたら旅に出るだ事。旅に出て自然の有難味をしみじ

み呼吸することだ。

「あれが南北さんが描かれた柳です」と不二綱君が大橋際の柳をゆびさした。なるほど繪になる柳である。私も南北氏から其の當時のスケッチ帖を見せて貰つて松江の水郷にあこがれなもつてゐたことがあつた。もうあのころから十幾年の歲月は流れたが、柳の樹には何等の變りもないらしく、旅人の目をなぐさめてくれるのが愉快である。宿の名はなにわ館と云つた。「蛭子さんもこゝへ泊まられたのです」不二綱君が時々説明の勞をさつてくれる。曾ては劍花坊氏も來たさ聞くと、三太郎氏の短冊もかゝつてゐる、私の親しい川柳家が悉くこの宿に泊つてゐるのも一入旅情を深くさせられた。

夜の會には少し早い町のおりさまも見て置きたいと思つたので、不二綱君や仙坊君の案内でぶら／＼歩いて會場へ出向いた。天神の境内を抜けて夜、穴湖畔にのぞんだ。嫁ヶ島が黒い塊となつて見えた。涼み船の灯やボートが波間にゆら／＼と揺れてゐた。

歓迎會は湖畔の「みどり」



で開かれた。九時ごろになつて漸く顔がそろつた。ゆつたり

と、のんびりとした會である大阪のやうに電車が無くなるから歸途を急ぐ人もゐないしみ／＼として句境に浸るこゝが出来た。湖の底にはまんなる月が輝いてゐて私のこゝろをそこへ引きすつて行つた。李白が醉興に月を捕はんとて溺れて死んだ陶酔境が羨ましかつた。私のその夜の話のなかには川柳ささうした三昧境をも説かずにはゐられなかつた。そして世界的文豪ラフカディオ・ヘルンのことなごも思ひうかべて、先生のことなを少しく話したと思ふ。

當夜の句報と句會の狀況では松江支部の仙坊君が前號で詳しく報じてゐるから省略するが、この柳友たちが私達の爲にどんなにまごころを持つてもなしてくれたことか。不二綱君をのぞいてはみんな初對面の人ばかりであるが、舊知の如くに語り且つ呑んだことはいつ迄も忘れることが出来ない。夜の白らむころに

柳友七八人に送られ宿に歸つて深い眠に落ちた。(つゞく)

◇歓迎川柳大會

七月十日夜松江市天神みどりにて撮影。

(寫眞説明) 座つた人々。向つて右より仙坊、かほる、萬よし、路郎、二柳子、一香、紅陽、町二、腰かけた人々。砂詩朗、穂波、不二綱、粹浪人、柳山、舟帆、星路、弧呂一。立つた人々。一夢、映紫朗、天人、無鐵砲、一三六、春花、赤ん坊、亂喋子、喋朗、三雷波、華雪、舞姫馳、清宵

額 椽 と 畫

高須賀商店

大阪市此花區四貫島宮居町一〇



光州雜筆

蛭子省二

「生業の古川柳」から

(二十一) 芋賣の項に

芋賣といつて新造毒つかれ(四へん)を加へたのは、一寸穩當でないようである。此の芋賣は百姓を嘲罵した意味に用ゐられてゐる。

芋賣の餓鬼さ遣手手(十へん)備禿の事であらう。訂正して置きます。八月號の誤植の句

(三十五) しんし賣御健勝か

さ腰をかけ

(卅七) さし賣の老込むだのはたはし賣

(四十) どぶ六みおでんは夜のとも極ぎ

新聞雜誌から

『私語』(八月號)に云ふ雜誌の廣告を新聞でみて、川柳元祖考とあるから、初代川柳翁の御事績でも詳にしてあるのか。直に東京へ注文した所、さんでもない勘違ひ。下五が「……元祖なり」云ふ種類の句の短解だつたには、苦笑して汗がひいてしまつた。處が創刊された『性論』に三面子博士の「新末插花」が載つてゐる。斯ふいふものを御集めになつて居る事は、一年前お手紙で承はつたのであつたが、引續いて活字になるには嬉しい。何分不便な地に住むので、新聞廣告に依り書物は求める。伊東博士の談に羊頭を掲げて狗肉を賣るは、日本では狗肉を賣るけれご顧客が夫れを承知で且満足して舌鼓をうつのだから詐欺にはならぬ。川柳關係だつて愚者悪書を書き多し。筆者には罪はない。之れを要

するに我黨の士のものなら、責任保險附き言ひる。

東京支部の柳路さんから、中央新聞(七月三十日附)に朱書し送つて下さる。記者が「今日は面白い川柳を笑覽に供します」三十七句載せて註が附けてある。

見るに初篇ばかり。三人で三分なる智恵を出し(註)三人よれば文珠の智恵を逆に嘲つたのです。

これ丈けでは王眼を逸してゐる「三人で二分くじにせう」まで説明せねばならぬ。

跡乗の馬は尾計りふつてゐる奥様の加勢立白鍋の蓋

なきでも陣笠を罵つた意です。奥方づきを罵つた作者の心がよく出ゐる。この

註は川柳點の悪口を許り思ふからで、罵倒ではなく寫生の滑稽である。素人評は危しである。殊に

道問へば一度に動く田植笠

(註)一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふ

こいつたやうな意味と見ればそれでよ
ろしいのです。

に至つては、筆者は諺の意味を誤解し
て居らるゝ様で、一犬虚に吠ゆれば萬犬こ
れに和すなごら句の註にはならぬ。

舊七夕に二柳子さんを煩はし「川柳時代
大觀」を買つてもらつた。多忙で熟讀は
出来ぬが、西行法師のところが開いたの
で見る。三夕の寂蓮の歌が私の記憶と違
つてゐる。「村雨」ではなくて

さびしさは其の色こしもなかり
楨立つ山の秋の夕暮
こんな句もある。

田の鳥の左右にたてる楨紅葉
秋の暮坊主二人と公家一人
田の鳥に一首残せし網代笠
へんてつもない所を鳴はたち
序に勅選三曙も記す。

わたの原雲にかりがね浪に舟
かすみてかへる春のあけほの
たごへともいはんかたなし山櫻
かすみにのこる春のあけほの
鐘の音も花のかをりになりにけり
小初瀬山の春のあけほの

▽手紙から

高輪で化けたが來世牛になり
柳友からお尋ねのあつた句で、邪淫戒を
破つた僧は牛に生るの諺の出所を未だ
確かめてゐない。「不淨說法する僧は平
茸に生る」こともある。坊主が醫者に化け
て摩通ひは品川吟に殊に多い。

牛小屋、牛町にあり、牛を畜する家多
く、牛の數一千匹に餘れり。養ふ處の
牛、額小さく其の角後に蹄きたるを藪
覆ひ號けて上品なり、都て牛は行事正
しく殊に早し、形婉にして精氣撓ます
力量勝たるに軛をかけ。重を乗せて遠
きに運ぶ、人の用を助くる事其功誠に
少からず、古は淀鳥羽にのみありて
都の外には牛車なかりしに、御入國の
頃より許宥ありて、江府にも是を用ふ
る事さなれり、餘は駿河にあるのみに
て唯此三ヶ所に限りまごぞ。(江戸名
所圖繪)

江戸車町は芝高輪の手前、牛屋あり、
是はいにしへ御入國の時、東照神君大

津牛を呼びよせらる。百三十六疋云
ふ、御城の石垣の石を牽かせたり、二
代將軍秀忠君の時に至りて、牛方共大
津へ歸らむ事を願ふ故五十六疋を留め
て殘をおん返しある、飯田町邊に牛原
云ふ所あり、車置場は江戸橋の四日
市にあり、牛車追々渡世薄くなり、牛
三十六疋になる。其の後牛原の牛、今
の車町に來たる海ぎはの地車置場にな
る。漸々減じて今五軒となりぬ。大八
車のみ用をなす故なり、千場太郎兵衛
云ふ巨家あり、牛屋に千場氏あり、
太郎兵衛も此家の牛牽なり、故に七
人の苗字を己の姓さす、牛屋の名を恥
て近來衰微す、太郎兵衛其の家を買取
り、千場の名を止め別號さす、熊本侯
の金州達にして帶刀の免許あり(春波
樓筆記)

太右衛門は獅子太郎兵衛は牛を飼
(二二六へん)

品川の客を太郎兵衛遣つてゐる
(川傍柳五)

お訪ねした。入口の格子の上へ「木」ミ刻むだ鬼瓦がいられてある。承はるさ仙塲の外に吉田、木田等の牛屋があつて、其の木田の家を土藏附で上人の御父君が求められ、市區改正で取拂さなり、土藏石段の石は平凡寺に狂歌を彫つて建てられ、瓦はかく保存されたもの。尊い川柳資料になつたわけである。

本誌七月號に隠し町(愛敬稻荷)の事を陳べた所、久良岐翁から「愛敬稻荷は子育て観音を祀り居り候、周圍の工合ひ隠し町らしく推察せられ申候、碑文(祇園之神詠石刷を送りこける)此の外には、寶曆七年四月八日奉納の石水鉢あるのみ。他には何等参考物なし」ごお便りがあつた他の岡塲所は面影更に存せざるに、此處のみ未だ窺ふを得べしごは奇蹟ならむ? 鳶魚氏は「岡塲所は四十有餘を算へられしたが、其の三分の二は寺社の門前地である。淫賣の起原は宗教の祭儀に發生した

ミやら。此頃鮮かに説く連中は江戸の岡塲所ミ神社佛閣ミの交渉をも好都合だミ考へるかも知れない。だが江戸の市街地の武家屋敷を除いて。寺社の領地は寺社奉行の支配ゆゑ是も除いて。全く市民の住む處だけが町奉行の管轄であつた。寺社奉行は神職僧侶を取締る役だけに、警察力が乏しい、殆んど無いに近い。寺社奉行の職務からは私娼なごに關係はない町奉行は管轄地域が違ふために自分限りで社寺の領地に住む私娼を押へられぬ。

此の間隙を規つて私娼は町奉行の管轄以外の塲所に集まつたのである。洒落本を耽讀しても是程の事に氣の附かない者が夥くない。流石に一家の見を發表されて居る。然し神社佛閣ミ遊廓の關係を大觀した時に、必ずしも制度上からのみ論じ去る事は出来ぬ。そこにプリミチブな性崇拜の人間の本然性が現はれてくる。古川柳にも、住吉の乳守、下關の稻

荷町等の例はあら。生々の事は神祕で、そこに神殿娼婦の出現が宿り、江口は觀音、室の遊君は普賢の化身説が信ぜられる。決して意義のない事ではない。此の小研究は谷本博士の「現代宗教ミ性慾」にある。

現代人の遊廓觀を以てしては、古の人間慾の嵩高なる歎美はわからない。古句を味到する上には性殖器崇拜原理から究めねば現代の新しい理窟で押しではゆけぬ。

▽大太ほつち

富士山へ大太ほつちは騷つまづき三十七篇の句外二つを掲げ、本誌新年號に三面子博士の一文があつた。大太發意に就ては種彦も、一寸法師ミ反對の大男ミ言つてゐるが、四月號の中央公論に「ガインダ坊の足跡」ミ題し、柳田國男氏が一大研究を御發表になり、流行に唯一の學者文けあるミ崇敬の念を加わした。代田橋が大多ほつちのかけた橋ミ云ふ傳説

も面白く、藤蔓で富士山を背負つたミカその藤蔓がなくて地團太踏むだ足跡の沼が各所にあるなごは、句の生れたもごである。一讀されたなら古句研究の興味値が一層判明する。

碁石遁世

幼年の記憶

久流美

六才といへば未だ學校に行かない頃、末ツ子に生れた私は、その歳まで母の膝に抱かれて乳を呑んだものである。

父が醫者であつた私の家、それは村の郵便局の真向ひに、軒並より二間半程引ッ込んだ家で茶の間には爐を切つてあつた。

おちようもんさかいつて村の爺さんや婆さんが訪ねて來、所謂佛さんのお話でその相手になつてゐる母は卅になるかならぬであつた。

『でかいもんが未だ乳呑んぎるがケ』

能の面のやうな顔の傳七サの婆さんといふのが私をなぶるのが例であつた。自分の髪の毛の白いのミ同ンじやうないトツを持參して、それを爐端にうんでゐた。それにもう一人念佛を唱へながら居眠りをはじめる、ヨボノ爺さんが居た。座つたからには夕方になつても歸らない長尻で、時々氣の短い私の父は、この爺さんに歸るこゝを促したものである。その頃であつた。幼い私は、座敷の隅にあつた碁石を一粒、過つて鶉呑みにし家内中を騒がせたことがある。村で碁には退りをさらない父はいつもその對手を待つてゐたのであるから碁盤はいつも、座敷に出しつばなしであつたのだ。

呑んだ石は黒だつたか白であつたか、父が直ちに盛つた一服の下劑で、石は糞に交つて出た。そして私を抱へて春戸の便所側に見つけた母は、ニコ／＼と喜んだ。

その一粒の石はさうなつたか知らない然し元の碁盤に戻つて來ないこゝは儘である。多分便所の横にあつた汚ならしいせうなけ(水溜)へ捨られたこゝであらう。

それから卅年後の私はいま、浪六さんの好きであるこいふ風鈴の下に一文世をのがれ

こいふ古句が浮んで來た。めめぜん(一厘錢)ミ碁石の差はあるご、世をのがれたこいふ點には、風鈴の下の一文も、私が呑んだ碁石の一粒も變りはない。

風鈴の下に涼しい風をうけた一文は上品で雅味である。子供の尻から糞に交つてドブへ投げられた碁石は下品で臭味がある。

一粒の碁石はツイに故郷の土くれにまじつてその存在をみこめない。だが鳥驚の戦ひからのがれて葬られたこゝは、一粒の石にまつて幸福だつたかも知れぬ。

(八月一日記)

杓子を造る人々

「蛭子さんへ」

藤里 藤園

杓子の製造者達は木地屋と稱する。ジブシーに似た住所不定の職業團體である百井塘雨の「笏埃隨筆」に依るに彼等の根據は滋賀縣愛知郡東小椋村大字君ヶ畑であつて、同書の記述する處には奇恠な傳説も交つて居るが、信ずるに足る部分には、昔は此伊勢境の山谷に三百戸の轆轤師が住んでゐて、挽物を以て生計を立て居た。今は山中の樹木を採り盡した爲めに活計の便が薄くなつたけれども、古い免許狀があつて諸國の山林に心の儘に立入り木を伐る事が出来るので、追々に國外へ出し行き歸らぬ者が多くなつた。中にも木曾山に入つて挽物をして居る者が多い。併し村の氏神には毎年嚴重な祭事があつて此祭を勤める爲め、一二十軒

の村民だけは交代して村に歸つて住む云ふことである。

君ヶ畑の木地屋は何れの時から此地に居を占めたか、村の氏神「大公公大明神」を彼等は清和天皇の御兄惟喬親王と云つてゐる。有り得べき事ではないが皇子は世の中を練み給ひ二人の近臣を連れし此山里に隠れられた。村人に挽物の手業を教へられたのは此宮で、村民は當時の隨臣小倉の末である云ふ。此信仰は中々強いもので現に近代迄江戸大阪の木具屋なさが勸進して奉納した鳥居や水盤のあるこゝを「近江興地誌略」は語つてゐる。

惟喬親王は小椋に十九年住まはれて元慶六年に薨せられた云ふことは、獨り近江ばかりでなく遠國の移住者も之を言傳へて居る。併し自分は之を信ぜぬ上に此に「みこ」言つて居るのは皇族の御こゝでなく、やはり巫覡の「みこ」であ

らうと思ふ。語頭は岐路に入るが、巫覡を「みこ」云ふのは本來彼が神の血族である云ふ信仰に基く名稱であつて、王子若宮なご、云ふ末社の多いのと同じく、神の子なるが故に一般民衆に神意を宣傳する機能を持つのだと考へたのである。然らに其巫を中世には田舎で「きみ」も稱した見ゆ、家に君塚云ふ塚が多く、君ヶ畑君ヶ澤なご、山奥の地名は決して此處ばかりでは無い。巫女の神降しの祭場は清くして且つ靜かなる山中を擇ぶのが例である。又木地屋の手で作られる杓子なるものはいつの頃よりか民間信仰の對象にあつた。山の神に杓子を貰つた云ひ杓子が北辰の形に似て居る云ひ、同じ近江の多賀神社の杓子を始めて此物を守り出す社は諸國にある。飯盛云ふ不思議の神の名塚の名も極めて多いが、亦杓子に因があるのかも知れぬ。此二つの點から自分は木地屋が君ヶ畑の

深山に廣大な地域を占めて挽物の業を始めたのは必ず信仰に基くものであらうと信じて居る。

君ヶ畑開闢の時代は容易に決定するこゝは出来ぬが、本地の製造は古いこゝで轆轤の使用も存外早くからあるのである。「稜名抄」に轆轤俗に六路云云。圓轉木機なりともあり、轆轤卽の語は「空穂物語」にも出て居る。北國、其他の山中に六呂師六郎木等の地名の残つて居るのが澤山ある。皆昔時挽物をした土地である。近江でも君ヶ畑の西南に近き日野の町は古くから木具類の市場であつて、近き頃迄因幡の山奥に住む木地屋が、わざと轆轤を日野迄廻送して交易する風があつたことが「因幡志」に出てゐる。日野碗日野折敷云ふことは「庭訓往來」にも出て居る。京都に近い爲に宮廷御用の檜物を調達したので益々有名になつた。

『南陸志』卷三十五によれば君ヶ畑の

古文書は却して土佐國の木地屋が傳へてゐる。其中で承平五年の繪旨云ふのには小椋庄の轆轤師職の頭は小野宮の由緒も有る故に西は檜權の立つ程東は駒の蹄の通ふ限り諸國の山に入ることを免許する云ふのである。承久二年の文書は拙い漢文である。是には宮が君ヶ畑に隱遁せられた後に小椋庄の境域を定められたことを記してある。東は八風峠の雲分から西は百濟寺堺の峰の雲分迄が此郷の傍示であつた。されど此二通は明白に二番物であるが第三の延久三年の足利尊氏の免許狀はさうやら本物らしい。それには諸國の木地挽には山手は定規の如く其沙汰する。前々の如く諸役と關を免除する云ふ文言である。宛名は江州小椋一類君ヶ畑木地挽中とある。君ヶ畑宛の免許狀が土佐にあることは諸國の木地屋に對する特許狀を近江へ出したので注意すべきことである。内閣文庫にある轆轤師文書

六通は多く足利末期のもので宛名は轆轤師内木小太郎殿とある。御中の挽物杓子を調達したに依つて前々の如き特權を與へて置く云ふのである。これも勿論近江に住んでゐる者であらう。阿波美馬郡半田村の半田塗、福島縣會津市の會津塗等の先祖はやはり此君ヶ畑の一類であつた。「本朝國語」には伊勢國多氣郡の藤小屋云ふ村は杓子を作つて生活してゐる。惟喬親王の臣倉橋左大臣の後である故に、山に行つて自由に木を探る特權があること書いてある。「伯耆志」を見るに米子の町を始め村々に鉢屋云ふ人民があるが、一種別階級の部落と見てゐるらしいのはやはり木地屋の末であらうと思ふ。更に「東作志」には美作から因幡へ越へる山路は二百年程以前に開かれた峠で、あまり人里に遠い爲に旅客が難儀したので、藩では頂上に木地屋を住ませ、之に保護を與へ茶見世を開かせた。之

を木地糸屋云ふてゐる。山陰山陽の國境に村を作つてゐる多くの木地屋は、恐らくは何れ相當の利益を保證して行旅の便宜の爲め住せたのであらう。

明治から大正昭和の時勢は移るに從つて木地屋は生活に骨が折れるやうになつた。人は最早古文書を承認して無代で木を伐らざることを許容せぬ。岩代三代村の持山の中にゐた木地屋は村と契約して住んで居た。宮島や箱根の杓子師は古い由緒のある者で何れも社寺の特約の下に招かれて其門前に移住して來た者に相違ない。即ち彼等の杓子製造は信仰の餘勢なのである。而も箱根の杓子町なごもやはり近江との縁故があるを見へて斯う云ふ話がある。Y老人の昔譚に彦根の井伊家で輕い者に抱へられた君ヶ畑生れの男があつた。此者が或時金の入用があると言つて東京からフラリツ箱根の宿へ出掛け何ミ話をしたものか若干の金錢を取

つて歸つた事がある。それは彼地の杓子師からであつた。維新前後の事であるが多分其若者の懐中にはかの轆轤脚文書に見ゆるやうな古い書付が有つた爲めであらう。これを以て見ても近江の木地屋の威力は近年迄存續してゐた事が判明しやう實に杓子の製造者はかくの如く恠異なる職業團體なのである。自分には史實によつたのみであつて、此職業に關する古句はあなた(蛭子さん)が次號で發表してくださることを希望する次第である。

因に民間信仰の對照たる杓子に就ては後日機會を見て記述する事とする。

甲子園を通じて

庄 万 よ し

例年の通りやつて手に入れた指定席券で八日間通勤、吾れ等の日光浴にしてトツカピンなり、ノート一冊成績表に埋る。

(一)羅馬は一朝にして成らず
中等學校野球大會第一回が豊中のグラウンドで開かれて千人ばかりの觀客を呼んだ時から、鳴尾時代の昔の覆ひに八百屋の鮭を垂り下けた格好でぶら下つた數年を経て、甲子園スタンドを十萬人が埋める今日までには、技術の進歩觀衆の理解、當時者の措置眞に隔世の思ひあり、柳界の今日尙ほ豊中鳴尾の時代を出でず柳友各自の努力は早晚甲子園時代を招致せねば置かないであらう。

(二)三角を矯めて牛を殺すな
野球が盛んになるにつれ弊害も出來てくる。選手を買収、指定席券のプレミヤム、箇箇點呼を捨し、の見物、等々、の悪い方面を見て野球を廢止すべしといふ論者は野球を知らないものである。川柳も今日の柳友の熱で一層の向上に普及し見ることは疑ない事であるが、そこに見解の相違、感情の行き違ひ、柳諺の闇

鬪等々の免れ得ない裏面の醜聞も出来るであらう。それだから川柳を止める言ふ柳人は川柳を愛しないものである。水清ければ魚住まず、柳界の向上も普及の大旗の下に突進する輩は、グヅ／＼云ふ野次馬を氣にしてゐては仕事は出来ないことである。

(三)個性と社會性

野球は團體競技であるが、各選手はメンバーの一員として個性を尊重される。練磨されたる各自の個性の集團が立派なメンバーである。個を放れてメンバーは成立しない。川柳は社會詩である。強調する論者も、個性を放れて社會詩が存在し得ないことを知らねばならぬ。個性の發揮が川柳道の唯一境であつても、社會の約束を無視しては、川柳が存在しないことも甚な眞理である。

(四)隠れたる犠牲

守備のフラインプレー、攻撃の絶好安打に陶酔する何割の人が、穴室の中で畫策に慘嘆してゐるベンチコーチの苦心を買ひ得るであらうか、スタンドの立錐の餘地なき觀客を取締るボーイスカウト、大會委員の心勞を掛け値なく同情する人が何人あらうか、去月松江の行脚に、山陰柳界の先覺寸馬氏の墓標に詣で、感慨無量であつた私は、阪神に於ける幾多の犠牲的努力を續けて居られる柳友を知つてゐる。更に各地の隠れたる柳友の努力に多大の敬意を表するものである。

(五)勝者の悲哀と信仰

昨年十九回戦に負けた前橋の捕手片桐は本壘上にカツバミ伏して泣き止まなかつた劇的シーンより、勝つた靜岡の嬉し泣きにより以上のシヨックを受けた私は、本年愛知に破れた早實の合宿所の各選手の鳴軒の外に應援の誰れも發言するもの

もなかつたが、廣陵の合宿所の二階を見て更に勝者の悲哀に打たれた。應援の電報、激動の手紙等の寸隙なきまで張り廻されたる中に、今日の勝利を得る唯一の武器のバットに鹽を盛つて、勝利の祈願をかけてゐるのである。大抵の選手は守り袋を肌に着けてゐるものはない。松商の教頭が鳴尾八幡宮で祈願の道で電車に觸れて負傷せられたのは、さもあらう。其共鳴祭する能はずである。「一句一句はわが辭世なり」と宣言して芭蕉の句三昧は句即信仰であつた。柳翁忘なきも形式的でなくとも一つの信仰として存続したいものである。一つの作句は祈禱であり立願であり、法悦であり、殉教でありたいものである。

甲子園雜吟

すべり込みセーフの聲へ起き上り
大飛球レフト残して皆戻り
ツースリー投手必死のひわりやう
デットボール放然と四股を踏み



各地柳壇

臨海川柳會

八月十一日に南海線濱寺で、臨海川柳會を開催した。

路耶主幹、二柳子、朝陽、毒仙、炭車、よし江萬よし、十字路、彩秋、久耶、千沙、芳柳の諸君は午後から來場され、打連れて彩峯君の納涼閣に遊んだ。プールに温泉に我等は眞夏の晝を心ゆくまゝに都塵を洗つた。

夕から公園食堂の樓上で句會が開かれた。いゝ風があり、いゝ月が出て、いかにも臨海川柳會らしい會場である。當夜は松江の松丘町二君の來庭があつて、より親しみの深い會合となつた。會する者廿六名で斯うした離れたところの夜の會としては、豫想外の盛會と云はねばならない。名簿からその名を擧げると路耶、町二、萬よし、金剛坊、炭車、よし江、十字路、彩秋、久耶、加香、双柳朝陽、千沙、鮎美、芳柳、柳子、彩峯、燕柳、進一郎、舟々、

毒仙、源坊、松壽、三笑、二柳子、梧郎の諸氏（私藤園）

歸途萬よし亭で、町二氏のために乾盃をするこゝにした。濱寺の人々をそのまゝ移したやうな會合で、萬よし亭はために立錫の餘地がない。席上路耶主幹の即興都々逸を二笑美音をもつて放送し、その他各地柳界大家の披露振り、なごがあつて道頓堀がしんとするころに圓タケが八方に飛んだ。濱寺の會報は次の通りである。

「海岸」路耶選

月の濱並んで行くこ新派めき多
海岸へくるこ思案が又かはり静海
海岸でハツキリこ見た稲光り金剛坊
水泳に海岸の家をほめられるよし江
海岸の景色こらの家賃聞き眠聲
拜んでる隙に海岸暗くなり毒仙
トンネルを出るこ浦沙邊が見え萬よし

海岸の灯しは悲しませ
マいさんこくる海岸は歩、だけ
海岸のカメラに水着みなわて
裏はすぐ海岸ですこ招待し
海岸へ寝るには早い貸浴衣
引き沙と云ふ海岸に蟹が匍ひ
たまに來る海岸こもくだらけなり
海岸の生洲の鯛に月が照り
海岸へくるこ女は足袋をぬぎ

「花火」互

花火見て夜間飛行のこを言ひ
その花火ゆらりくゞ河に落ち
納涼へ浴せるやうに花火落ち
槿花一朝の如きひる花火
傳道は花火が消えてから續け
燐曳は暫し花火へふり返り
風鈴の音へ花火の音を添へ
町内の子にかこまれて花火鳴り
末の子に持たせば花火振り廻し
花火より藝者の酌が御氣に召し
奥さんも花火へ少し塗つて來る
花火揚る日に一日を家にゐる
何かあるらしい花火を寢間で聞き
満月をめぐけて花火揚るなり
里歸りの夜の夜花火へ誘はれる
花火揚る今日の佳き日を家にゐる
花火の夜顔覗かれて叩かれる
天の川の眞下へ花火揚るなり
物思ふ眼へ冷やかに散る花火
客あるが無かるが花火揚揚てゐる

源坊 梧郎 同 進一郎 朝陽 燕柳 進一郎 久耶 彩峰 舟々 毒仙 二柳子 十字路 千沙 町二 同 炭車 芳柳 鮎美 藤園 源坊 萬よし 朝陽 燕柳 進一郎 久耶 彩峰 舟々 毒仙 二柳子 十字路 千沙 町二 同 炭車

花火船何時ともなくに取まかれ
看病の旅の花火を見せたりが
駈落に親の花火の淋しうて

互

やつと扱けた人出の方を振り返り
御無沙汰の詫も人出の中ですみ
入場無料遂に喧嘩を初めたり
盆踊人出は丸く取りかこみ
人出から人出へ廻る辻藝人
屋臺店意外の人出に賣れぬなり
夏の夜の人出に姉は椅子を出し
押合の下でおつとさん虎おくれ
切れたさ人出の中でお辭儀をし
人が出たわりに賣れんと戻つて來

風船が人出の中で割れる音
押されるがまゝに鳥居を潜るなり
末の子を連れて人出の中に立ち
人出にて踏みにじられた夢畑
人出からそれて背の兒おろすなり
よう拜まなかつたさ母淋しさう
堅く手を握つて人出を右左り
ふだん着の儘で人出を見に出掛け
大粒の雨が人出の中へ落ち
人出から足袋のこはざが外れてる
母親は人出を聞いただけでやめ

互

千乾びた糊郵便局は義理で出し
死んだ子も糊の着物で泣きました
幼稚園ハキハキ糊を買ひに行き
行き過ぎた糊へ娘の派手な聲
糊おいて髷だけ見せる段梯子

同路同 選路耶 十字路 彩秋 双柳 朝陽 三笑 藤園 燕柳 萬よし 炭車 悟耶 毒仙 彩峰 千沙 柳中 進一耶 芳柳 舟々 源坊 町二 路耶 選耶 進一耶 燕耶 萬よし 舟々 毒仙

買ひに行た糊に母親待ち兼ねる
利きすぎた糊に息子はちこ困り
書過ぎて糊屋黙つて通つてる
糊つぎを子供へ無理に着せて出る
氷屋の前に糊屋も荷か下し
湯上りの浴衣は糊で堅く立ち
買にやるほごでもないが糊が要る
冷飯を袋に入れて母捨てす
糊ならぬだけ辻ビラが残つて來
無雑作に新聞で糊の手を拭ひ
糊の手へ意納岩知書が届き
利きすぎた糊を叱らず手を通し
糊つぎに父の堅さを見せてゐる

川青明忌

大正四年八月二日に、須磨の海岸で亡くなつた藤村青明の十三回忌を本社主催の下に、八月七日の夜神戸の協和會館で營みました。選句に先きだつて故人の親友路耶主幹から「青明とその時代」と云つたやうな題で講話がありました(二柳子記)

路耶、萬よし、凡耶、彩秋、山水、梅雅、笑人、播洲、旅雨、明鳥、義坊、寛柳、鎌月、素生、唾花、柳司、一狂、萬登、紋太、二南、亂耽、清公子、舟々、二柳子(出席者名簿より)

書置の哀れは文字が違てゐる
遺書の母を思ふた筆の色
書置に燈臺の灯か荒れてゐる
書置に戀ふ云ふ字が見當らず
書置が露にしめて見付けられ
書置をしてから三日あまり生き
花の散る窓で書置き書終り
書置となつてスクリン變るなり
人書置にもう損を云ふ屋形なり
地書置に彼奴らしゆに死んで
天書置に義兄の耻が書いて無し
軸書置に先を急ぐも哀れなり

瀧

瀧の來て怪我の拍子を考へる
瀧の流れ西洋人がなにか見て
瀧飛沫心地よく見て箸をこり
瀧の音残して茶店しまはれる
せみの聲聞はすなつて瀧へつき
青楓瀧がこころした風になつて
クレツプ瀧がこころした風になつて
瀧の水觀光團に少な過ぎ
今着いた瀧見物のほしやぐなり
茶店とは別に瀧道聲がする
人瀧の下人がゐるさ思はれず
地生活を忘れて瀧を見詰めて居
天瀧の音父と吞ませるさこで待ち
軸先着が瀧の景色になつてゐる

犯人

獄中記世に出る頃に獄を出る
手が延びることを犯人知つてゐる

清公子 一狂 唾花 同素生 同舟々 同登 清公子 路太 紋耶 二南 唾花 梅雅 素生 悟耶 萬登 彩秋 一狂 旅雨 素翠 鎌月 明鳥 路耶 紋太 笑人 彩秋

犯人を捕つた騒ぎ露路をぬけ
犯人へごの裏道も明るすぎ
非常線も犯人は汽車の人
罪になる事をその後知りまし
犯人の寝覺めに馴れた朝に
織踏を抜けて犯人がくがへる
犯人を八ツ手の様な手でなぐり
人間にもうなつてゐて捕はれる
犯人は今一人道を歩いてゐる
犯人はめしやでふつこ石をかみ
犯人が女名前の家にある
犯人へ一人優しい巡査ある
交番所も犯人の様にはされ
犯人の若さが皆に疑はれ
犯人をならめばにらみ返すなり

藥

劇藥の瓶は埃りの中にある
粉藥水を手眞似で貰てゐる
藥局へヒョロくくお客さん
これだけで死ぬと見ぬ猫入らず
血管を藥が廻る音がする
又逢ふ藥を母が買ふてくる
主義あつてダラスケの外呑まぬ
幾日も富山の藥裏を向き
だましても藥と知つて子は飲まず
小包の中から家傳藥が出る
粉藥何時忘れたか餘つてゐる
藥嫌でしやんとした腰
藥のむだけのその日が永いなり
女房に今日も藥に勧められ
弱い子が小使室でゐる

唾花 萬よし 清公子 梅雅 明鳥 二柳子 紋太 鑣月 同 路郎 同 素生 同 二南 同 清公子 同 二南 笑人 梅雅 廣路 萬よし 柳登 播洲 彩狂 素秋 同 亂耽

藥局できつとさくくのを買ふて來
きつ藥風呂を戻つてつけかへる
うたがうて息子藥を鼻へあて
藥さへのめばと母は思ふてゐる
ヂヤスマターセなどごの夏吞見
風邪藥明日も働く身体なり
服んだかこやつた藥の念を押し

蟹ヶ池 支部 創立句會

川柳雜誌社蟹ヶ池支部創立句會を兼ね、講演
會を七月十七日午後一時から、療養所娛樂室
で開いた。萬よし先生の「ごう云ふ所に
川柳が生れるか」の御講演が終つて路郎先生
は「川柳に生きよ」と云ふ題で私共病人に大
變參考になる御講演があり兼題「希望」の被
講があつて應募句の中から、實例を以つて川
柳と云ふものは、如何なるものであるかを御
話下さつたので、門外漢にも初心者にもよく
諒解が出来、得る處が多かつた。

斯くて參會者七十餘名が大きな喜びと、多大
の満足とを以て川柳の陶酔境裏に、解散した
のは四時半過ぎであつた。(杏三)

川柳水松納涼句會 (石川)
七月九日 本田柳一路報
金澤の久流美先生をお迎へして、一行十二
名片山津温泉森本旅館に着し、浴の上芝山
瀉の涼風に吹かれながら句作に没るなど
快な一日でありました。

貸浴衣 久流美 選
(佳)貸浴衣焼印のある下駄をはき 城四
十年も若かへる氣で貸浴衣 太公坊
貸浴衣ほのかに匂ふ女なり 金鐵子
貸浴衣着れば心の伸びが見 富久雄
貧乏の己れも同じ貸浴衣 みどり葉
(人)ふさごころの財布氣に貸浴衣 柳一路
(地)賤香水だけふつて貸浴衣 小波
(軸)賤香水蒸盤に更けたのを忘れ 水聲
(軸)腕まくりして貸浴衣十五點 久流美
次の間 葉選
(佳)次の間の衣桁にしまつたタオル 久流美
次の間もあけて安來節になり 柳一路
次の間で慘劇を語る足の跡 太公坊
次の間に佳人もきりに想をねり 富久雄
(軸)次の間の女もやはり獨り者 みどり葉

涼舟 金鐵子 選
(佳)ばれこんだばらを押へる涼舟 葉選
風流を他所に飲んでる涼舟 盜鐘
涼舟船頭もロリ酔ただけ 柳一路
涼舟岸だけ廻る女連れ 太公坊
岸ばかり寄つて涼みの舟が行き 小波
涼舟いくさの様な川開き 松雪堂
(軸)涼舟一幅の繪の中に行き 金鐵子

る熱心に句作する柳氏 態度は涙ぐしい
 までに緊張してゐる 三時半席題を締切ると
 同時に宿題「夜の雨」紅短冊選「日向」右大臣
 選は發表された ついで席題關門吟「關所」
 句吐五選は柳葉子に依つて披講され、席題
 「棚」鯨左衛門選「荷」みきを選「血判」荻頭子
 選「雲」寶月選「藥水」二葉里選は各自選者に
 依つて拍手の内に披講を終つた時に五時、そ
 れより、晚餐を共にし句作の後を潮湯にひた
 る人、プールに水泳を試みに行く人など、思
 ひ／＼に散會したのは六時過ぎであつた。

因に本日の來會者は、狂史郎、風鈴坊、寶月
 萍花、だるま、寶六、山鳥子、柳平、秋外、兵六
 荻頭子、いるか、うらなり、鯨左衛門、二葉里、
 みきを、大洋子、啞氣郎、右大臣、牛頭子、雨の
 介、木堂、流坊、柳葉子、紅短冊、天骨、華化露、
 菅灯、杞柳、臺水、沈澱子、竹鈴、天祐子、佩刀
 子、肥後守、しげるの諸氏(名簿順)採點の結
 果、一等雨の介、二等右大臣、三等みきを、四
 等二葉里、五等木堂、(以下略)(右大臣記)

宿題「夜の雨」 紅短冊選

交叉する灯にアスファルト光る雨 右大臣
 ウエトレスばかりで唄ふ夜の雨 柳平
 使ちさ大儀に雨の晚を 牛頭子
 雨濡りの騒ぎ隣りも起きた音 山鳥子
 氷屋の店が淋しい夜の雨 娘知苦
 半開けの店も並んで夜の雨 久念坊
 雨の夜隣りも鳴らす蓄音機 荻頭子
 夜の雨灯影寫して静なり 右大臣選
 青鷲真こんなに撮れた陽が當り 兵六

お向ひの店が日覆を出して午後
 向ひ側午後は日覆の店になり
 撒水車丈の日向の人通り
 日向から逃れて飽まだ研げず
 母眼鏡取つて日向へ顔を出し
 片側は日覆ばかりのベルティンカ
 取り止めた命日向に静かなり
 席題「關所」 五選一句吐三點句以上
 庇を持つ足は關所の裏を行き
 馬鹿になる隠密關所へ手間が入り
 變裝の密使を關所氣がつかず
 關所も無事にお江戸へ近くなり
 嘲笑ふ野武士を關所持て餘し
 借り手形關所に恐く通り抜け
 膝栗毛關所を抜ける藝を持ち
 受附けは關守さ云ふ藝なり
 早口に云つて飛脚は關所過ぎ
 關守をだまし、通る好いきりよう
 妙なのが來ぬかど關所待つてゐる
 人相書 届いて關所物々し
 お針子の關所にされた車夫溜り
 駈落ちに連絡船と云ふなやみ
 (高點)問道を抜り關所の月を見る
 席題「棚」 鯨左工門選

柳平
 大洋子
 寶月
 其笛
 落下傘
 二萬里
 柳葉子
 寶六
 兵六
 狂史郎
 右大臣
 牛頭子
 だるま
 二萬里
 萍花
 風鈴坊
 寶月
 秋外
 みきを
 華化露
 荻頭子
 紅短冊
 荻頭舟

盆裁の棚が反つてる乾きやう
 寢轉んだ眠に棚の上まだ積める
 炊事場の棚に豆腐の釣銭があり
 留守番の口淋しさに棚を見る
 棚へ手が届く欠伸を留守居する
 棚卸金のかゝつた屑をよせ
 あき棚と重いて持て餘してゐるやううらなり
 二葉里

小器用に鋸が使へて棚が出来
 乳 母車女暮しの商い荷
 母がする荷造り殖へるばかりなり
 母親の名で凸凹の荷が届き
 出迎ひの手荷物うばい合われつゝ
 同じ荷を今年も富山背負つて來る
 紙箱の山輕しと車來る
 一枚の荷札發車へまごつかせ
 親心旅へ荷になる物が殖へ
 席題「血判」 荻頭子選

連判状お家を呪ふ血がにじみ
 血判を資本家反古のやうに見る
 黙々として血判は處するもの
 血判は怪しい音を庭に聞き
 血判を押せば主魁の眼さ出合ひ
 血判の一人は重い返事なり
 血判が濟んで言葉が變へられる
 血判の一人になつた顔の色
 月選

ウインドの雨は眞綿を引き延ばし
 雲が出て少し静ます水喧嘩
 足元へ雲を眺めて晝にうらなり
 まんまるの月が轉がる雲に逢ひ
 眞黒な雲の行衛に雨の富士
 御野立所雲も霞も入れて撮り
 登山服重なり合つた雲を抜け
 釣竿の先さへ動かめ雲の峯
 (軸)雲いつか晴れてしまふ高い空
 席題「藥水」 二葉里選
 絞り出すやうに藥水たれて來る 杞柳

もう歸るから圓タクを呼んでこい

八月十二日 (二)

夜の雨雪駄の事も氣がつかず
夜の雨まだ座蒲團の温か味
雨垂れの音も静かな夜の雨
盆踊り草がなびいて朝こなり
盆踊り橋で見てゐる二人連れ
盆踊りあのおつさんを見逢へる
盆踊り村一番の聲を出し
盆踊り一人はそれて水を飲み
同 同 同 同 同 同 同 同

第八回鼎座小集 (神戸)

八月十九日 小鐵千鳥報

零落、女工、酌
おちぶれて慣れぬ御世辭に慣れ行
零落の今又妻に病みつつかれ
落ちぶれた身に梯のまざり
黄昏を急ぐ女工の姦しき
しようもない話に女工よく笑ひ
自轉車を片手で女工シヤレてゐる
暮れかゝる街へ女工のほつこ出る
酌する手疑ひ深く見詰められ
獨酌の泰然として太い息
男酌で氣勢の上るアツカンシヨ
獨酌で添乳の妻と話し合ひ
同 同 同 同 同 同 同 同

電氣柳壇句報

安井ひろし

寺の庭水溜りにて廣く見え
水泳にまた行き違ふ貸ボート
氣持よゝ夜店の植木まけてくれ
花散つて五重の塔の人がへり
同 同 同 同 同 同 同 同

而會を社長うるさい様に立ち
養生も出來ずあせてる紺サーヅ
米囀へ因縁がつく梅雨頃
眠さ見る眼の行く末を傘でよけ
湯を出れば街の灯りに類笑まれ
寄進札百圓也を太く書き
竹は皮はぐれ返つてついでゐる
眼鏡ふきくして世間話を續け
キツス等してひつそり別れゆき
パスケット入たいものしやちこほ
針持つた事はアボンの釘にて
かけつけたかのように出る交換手
勝手口あつて女房の御意に召し
同 同 同 同 同 同 同 同

萬よし偶會 (大阪)

紡績の窓の雲見て何人になる
妙齡になつて店には落ち着かず
妙齡を耻ぢず夕刊賣つてゐる
妙齡がちに長過ぎる雨午
十五兄も噂を聞いてくる
五郎はんだんれと浴衣がいで會ひ
道頓堀褰持つ人に追ひ越され
褰持つて中座の灯つは振向かず
夏密柑
同 同 同 同 同 同 同 同

船酔を半は助けて夏密柑
夏密柑むいた駄實にもめてゐる
夏密柑爪を切つたことを知り
夏密柑昨日半分喰べたまゝ
夏密柑手さげ袋にはじこばり
夏みかん火箸で穴を明けてむき
濱寺で存分焼けて夏密柑
同 同 同 同 同 同 同 同

丁稚もう書寢にこりた顔の墨
葦敵か来るこ書寢のへさ起き
來客に書寢枕を持つて逃げ
扇風機止めに伸べした書寢の手
上京の友を返つて來て書寢
書寢だけ役徳にして藏係り
風鈴が書寢をそるやうにまひ
書寢から起きるこ金魚泡を吹き
一切れの西瓜に書寢起される
書寢から起たと言はず應接間
同 同 同 同 同 同 同 同

暖簾

錢湯の暖簾有志の名が並び
暖簾へ母の手際の糊が利き
暖簾を分ける分けんでもめてゐる
新任は暖簾の前で躊躇する
暖簾を分けて出前の聲になり
ほろ酔の又暖簾へ吸ひ込まれ
夕立に白靴あはてまいこまか
雷だけ鳴つて夕立逃げちまい
夕立を目がけて汽車の走るこま
夕立に野猫は軒の下へ逃げ
同 同 同 同 同 同 同 同

鯛

贅澤な口が鯛へ箸をつけ
その聲で生きてゐるなり鯛賣り
七夕へ鯛のされる笹を立て
一人後家今日も鯛屋さんでゐる
鯛網こぼれたまこを兒がせ
留守をする養子に鯛當てがはれ
賣り切れ鯛屋たよりなく歸り
同 同 同 同 同 同 同 同



編輯室から

路 耶 生

▼營利雜誌でさへノホホンでやつて行けない雜誌界へ新に仲間入りをして、市内各書店に配本を断行した「川柳雜誌」が、さうして彼等に伍して行くかといふことは、單に私達の問題ではない。柳界をあげての死線を越ゆるか、越ゆる得ないかの問題でなければならぬ。それだけに今後の私たちの悪戦苦闘が思ひやられる。多少でも川柳に興味を有する方々は我社の總動員に應じ、社會宣傳が經濟的確定の一役をつとめて欲しい。各書店の賣行は未だ判らないが、さう樂觀してゐられないと思ふ。▼組織變更は大變評判がいゝので喜んでゐる。だんだん基礎工事が強固になつて來た。この實際的表はれであるから有難い。▼糸屋町の一派が新に支部を組織して、糸屋町支部と稱することに。幹事は毒仙君の噂もあつたが若手に譲つて、川合舟々君が引受けることになつた。最も毒仙君も大いに動くことにはなつてゐるさうである。糸屋町支部開設をお知らせすると同時に、同支部の發展を祈つておく。▼本社の八月例会は例年の納涼船を廢して、十一日に濱寺で臨海川柳會を開催した。夜間でもあり、遠くもあるのてどうかと思つてゐたが、なか／＼の盛會で二柳子君がニコ／＼してゐた。來阪中の松江

の町二君が來會されたのも、みんなを愉快にした。大阪へ戻つてから「萬よし」で同君のために斂蓋した。(會報参照)▼川柳青明息は八月七日に神戸で開いた。暑いので、萬よし君寄贈の氷の柱を立て、煽風機を回轉させて作句能率をよくした。▼重忠であつた今井卯木氏は令息一郎氏の通信によるさ、漸く危機を脱したらさうである。柳界多事の際一日も早く全快されん事を祈つてやまめ。▼客員吉田清滿伯が七月二十七日に、桃山病院に入院されたが、幸ひ輕かつたために、八月十二日に退院され、直ちに九月號のために力作を寄せられた。▼二柳子君は八月號の發送を終るご同時に、郷里金澤へ歸省した。そして金澤の歡迎會、小松の歡迎宴に臨み、山中温泉に遊び、八月六日に歸阪し、七日午後の盤ヶ池支部句會に出席、同夜神戸市で開催された本社主催の青明息に出席した。その精力セツリンさは驚嘆に値するご同時に、怠けてゐて口はばつたごことを云ふてゐる連中の清涼劑でなく、てんでなであらう。僕も又同日午後同じ阪急沿線の花屋敷で開かれた精常園の、林間飯急開堂式へ三好革郎君と共に出かけ、その足で神戸の青明息へ向つたのである。暑さも何もあつたものではない。▼景氣のいいごことを云へば本社の印刷部では、いよく輪轉機を握つた。近く柳界の新聞を刷る時代が來やうと思ふが、川柳以外のものでも、遠慮なく注文を發して貰ひたい。尤も御注文は一切藤本卯之助君の方へして貰ひたい。小生は單に提灯持ちなつとめたのに過ぎない。▼次は涙

の記事である。斯うしたごには私の筆は常ににぶる。が、お報らせしない譯にいかないから簡単に申しあげて、同時に哀悼の意を表しておく。▼本誌創刊以來の同人であつた松雨西垣覺三君が腸チブスを病んで、八月九日午前六時過ぎに長逝した。病臥してゐるごいふことすら知らなかつた自分は、その報を手にして全く茫然として暗涙をのんだ。享年三十七歳。多くの春秋をのこして逝つたのである。葬儀は十日の午後五時に長柄葬儀所で執行された。川柳家では飯山、悟郎、葵豆、馬行、彩秋君等の顔が見えた。川柳家としての會葬者が少なかつたのは、お知らせする時間がなかつたからである。▼本誌選者小西兎絲子氏の夫人が七月二十四日に亡くなられた。悼むに辭がない。▼前田青岸君が八月三日に永眠した。同君は近年柳會を去つて、一意專業のために活躍してゐたが、神戸川柳乙鳥會の牛耳を發行して神戸柳壇の礎をきづいた人である。私ご最後に逢つたのは、二三年前、神戸新聞社階上で開かれた神戸川柳講演會で、同じく演壇に立つた時である。久しぶりだつたので堅く握手して分れたが、あれが永久の握手だつたのである。

轉居と改號

▼森立名氏滿洲四平街滿鐵販賣所へ▼中野柳陽氏長春露月町二、四〇、二五へ▼江口辰次氏朝鮮咸鏡南道文川部草面川内里小野田セメント會社へ▼田中不倒人氏東京市日本橋區浪花町十一當地へ▼森石竹氏舊號案山子石竹改む

投稿規定

- ▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記すること。
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼各地會報は清記のこと。
- ▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募 集

第四卷第十一號課題

九月十日締切

(各題二十句以内)

- ▼和 尚 蛭子省二選
- ▼末の子 喜田飯山選
- ▼夫 婦 青砥不二綱 共選

第四卷第十二號課題

十月十日締切

(各題二十句以内)

- ▼色 街 塚崎松郎選
- ▼糸 屑 麻生葭乃選
- ▼古本屋 高橋かほる 共選

每 號 募 集

- ▼近作柳樽(卅句以内) 麻生路郎選
- ▼古句質疑 蛭子省二擔當
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

一 部 參拾錢
六 部 壹圓六拾錢(稅別)
十二部 參圓(共稅別)

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みにするのが一番確實でありませす▼誌代受領は送本によつて御承知願ひませす▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひませす▼御希望により集金郵便を差立てませすが御不在中でも頂ける様に願ひませす、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けませす▼御注文には何月號よりと御指示願ひませす▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひませす▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年八月廿五日印刷
昭和二年九月一日發行
第四卷第九號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二 郎
大阪市西成區千本通五丁目七番地
發行所 川 柳 雜 誌 社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

賣 捌 書 店

- (大阪) 大賣捌 サラケ書房 其他市内各書店
- (東京) 仲見世 玉森堂 (神戸) 米田 後峰 (金澤) 石井
- (函館) 石塚 (廣島) 廣文館 (石川縣小松) マット屋

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こゝうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にまつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かを／＼で讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路耶生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

古書目録

が出来ました。御入用の方に送呈します。

「川柳雜誌」で見たと御書き添へ御請求を願ひます。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

母親も白鶴ならこ一つ受け
恩給も近く白鶴樽で据ゑ



灘 津 攝

釀 社 會 名 合 納 嘉

古本屋漁りの興味こ！

古本屋そのもの、面白味を知りたい人は「古本屋」をお読み下さい

古本屋

年五回發行

實費にて頒布

一號賣切二號少數

殘本あり

珍書や絶版書をおさがしになりたい人や古本の價值を知らうとなさる人は「古本屋」をお読み下さい

「古本屋」發行所 荒木伊兵衛書店

大阪市西區江戸堀南通り三丁目

電話土佐堀一四六二番

振替大阪一二八五六番

残暑

貝印レコードあり

メロディー可!!

涼風 颯々 自ら至る

九月新譜 六十三枚

貝印レコード

社會資合
會商器音蓄外内